
世界の窓が全開ですよ

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の窓が全開ですよ

【NZコード】

N2225Y

【作者名】

雨月

【あらすじ】

彼の名前は新戸風太郎。探せば世界に三人ぐらいは似ている人がいるといわれる高校一年生の生徒会長である。一学期の初日、彼は久々に友人に出会うのだった。

第一話・一陣の風

第一話

俺の名前は新戸風太郎。羽津高校に通う高校一年生である。実年齢と彼女いな歴が一緒という世間一般的な男子生徒だと自分では思うわけだ。いや、もしかしたら全校生徒中の約半数が心のどこかで俺の事を好きかもしれないと言う確率は無きにしも非ず……まあ、こんな情けない感じだが、一応生徒会長をしているのだ。

今日から高校二年生二学期が始まる。中だるみにならないようにして、しあとのお達しが夏休み前に先生から出ていたものだが、勉強合宿やらなんやらで俺の夏休みは一ヶ月もなかつた。

「おつかしいなあ」

いつもポストに入つていいはずの手紙が今日は来ていなかつた。他の郵便物は来ているから郵便配達のおっさんが遅れていると言つわけでもないはずである。まあ、目的の物が入つていないのならそれはそれで構わない。文通相手への返事が面倒だからである。

ちょっとと心配になりつつも、俺は学校へと行くことにした。

一学期一発目という事もあり半日で学校は終了。生徒会も明日からだし、今日は遊んで帰ろうかしようと下駄箱を開けてみた。

「あん？」

靴の上に一通の手紙が置かれている。

『拝啓、新戸風太郎様。本日の放課後、生徒会室にて待つてあります。』

女の子らしい文字、俺は念のため鼻を近づける。

「くんくん……女の子の匂いだな。きっと俺の事を生まれる前から好きだったに違いない。男の匂いは一切しないしクラスの連中の仕業でもなさそうだ」

俺にもね、好きな人の一人や一人はいるものさ。でもなあ、一人はこの高校にいるとばかり思っていたら海外に行つて行方知れずだ

し、もう一人は転校してしまったんだよ。思いも伝えられないへた
れ野郎と罵るがいいぞ。

さて、それはそれ、これはこれである。女の子を待たせるのは古
来より悪いものだと俺は親父に教わっている。近くの男子トイレへ
入つて寝癖を一生懸命押しつける。第一印象がいいように身だしな
みチェックを怠つてはいけない。

「……寝癖があるのはぐつすり眠れたつて事だ」

去年から使用している生徒会室へと足を向ける。『男の園』と呼
ばれし俺の牙城はその名の通り全員男子生徒（イケメン、体育会系、
文系、理系、なんちゃってチヤラ男等）で構成されている為副生徒
会長、あるいは書記長の女子と淡い恋物語を想像していた俺はショ
ックだ。

「あ、あの、生徒会長……私、生徒会長の事が好きで生徒会に入っ
たんです。副生徒会長、がんばりますっ」

しつこいが、こんな甘い展開は一切ない。副生徒会長も友人の男
子生徒でがっかりである。

もう少しで生徒会室と言つといろで副生徒会長に出会つた。

「新戸君ではないですか。遅かったです」

眼鏡の秀才、中州秀作が俺を見上げるよつにして首をかしげる。

「中州、お前まだ帰つてなかつたのか？」

「ええ、ちょうど新戸君を呼びに行つてから帰るつもりでした」

「俺を呼ぶ？先生か？校長か？はたまた写真撮つていたのがばれた
ソフト部の部長にか？」

いい尻だつた。今度はテニス部にカメラを持つて行こうかなと思
う。

「いえ、手紙を渡していると言つていたのですがもらつていの
ですか？」

「ああ、手紙ならもらつた」

俺がそう言つて手紙を見せる。それに触ろうとしたものだから歯
をむき出して威嚇すると意外そうな顔をして手を引っ込んだ。その

後、中州は一度頷いて手を振つてくる。

「それなら話は早いですね。僕はもう会つてきましたから失礼します」

「

「気を付けて帰れよ

「ええ、気を付けて帰ります」

中州が廊下の角に消えてそこで首をかしげてしまった。

「ん？ あつてきた…… つてどういうことだ？」

まさか、俺にラブレターを渡してくれた相手は中州の方にも同じようなラブレターを？ いや、しかし、中州には許嫁という古臭くも一度はあこがれるような相手（母親に確認したところ、俺には許嫁はいなかつた）がいるから大丈夫だろう。

いや、待てよ？ そういうえば今日の朝、手紙が来てなかつたな。そして、放課後手紙が来た。

改めて手紙を見てみる。

「…………まさか、な」

頭の中にぽつくり浮かんでいた一つの可能性を即座に打ち消し、それでも時間を確認する。

「…………あたつていたとしたらそろそろ許容範囲ぎりぎりか」

時間につむるさい相手の為廊下を走り、急いで生徒会室前へ。その前で俺はもう一度身だしなみをチェックしてオーケーを出す。軽く扉を開けると、当然ながら生徒会委員は一人もいない。

だが、一人の比較的小さな女子生徒が立つて俺を迎えてくれた。

「新戸生徒会長、お久しぶりです」

きつと、今の俺の顔を見たら誰もが『まるでアヒルだった』と言つてくれるだろ？ そつと、俺はいつだつて醜いアヒルの子。

第一話・一陣の風（後書き）

チャック全開ですよ、とはまた違ひ話です。続編じゃないですね、
はい。本来は一つの作品にまとめられるべき話だったのですが、諸
事情によりあちらは生徒会長の話でまとめた（つもり）ということ
になっています。前作が微妙だったので「あちらはそれなりに頑張ろ
う」と思っています。

第一話・マイフレンド

第一話

男の牙城、女子生徒たちからは「の穴」と呼ばれている生徒会室に少し身長の低い女子生徒が立っていた。

「倉山千穂……」

ついフルネームを口にしてしまう。

「お久しぶりです」

少々、相手も緊張しているようだった。

俺が中学の生徒会長だった頃、千穂は副生徒会長だった。ちなみに中州は書記長である。

俺が黙っていると千穂は首をかしげた。

「もしかして身体の具合でも悪いのですか？」

「そんなわけないだろ。久しぶりにあつたから驚いているだけだよ」

「そうですか。それなら問題ないですね。椅子があるので新戸先輩、座つてください」

此処は俺の牙城のはずである……はずなんだけどなあ。有無言わさない口調だからしようがない。ここで嫌だと否定的な態度を取ると面倒な事が起こる。

千穂の対面に座り、俺はため息をついた。

「やはり、高校の生徒会長といつもの中学の生徒会長よりも大変なのですね」

「え？」

「ため息が出ていたのでそう思いました」

「あ、ああ……まあ、そんなもんだ」

まさか千穂がいたから……なんて言えないな。

「それで、お前なんでここにいるんだよ？ ああ、もしかしてまだ夏休みだから会いに来てくれたのか？」

「いえ、違います」

もうや、この時点で鈍くない俺はなんで此処にいるのか気付いていたよ。でも、認めたくないって言つ気持ちの方が大きいのよ。「あ～じゃああれだな。」この近くにたまたま寄つただけか？そ うなんだろ？」

「いえ、こちらにまた引っ越してきたのです」

ほーらね、やっぱりだ。俺の嫌な予感つて言つのは素っ裸で警察署に行つたら捕まるのと同じくらいの確率で当たる。

「あ、あ～…… そつなのか」

「ええ、そうです」

「そつか…」

俺の対応に千穂は首をかしげていた。

「……私はこうしてまた新戸先輩や中州先輩に会えたりした事が嬉しいのですが新戸先輩はそうではないのですか？」

「ああいやいや、嬉しいぞ、うん、嬉しいけど気持ちの整理が出来ていらないからちょっと驚きの方が大きいだけだ。ところで、家の方はまた前と同じ場所なのか？」

中学校の隣に家があった。夕飯に呼ばれる事も稀にあったが、千穂の親もちょっと相手したくない部類ではある。

「いえ、違います」

「もしかして高校の隣か？」

それならまあ、千穂らしいと言えるんだけどな…

「いえ、新戸先輩の家の隣です」

もし、俺の家の隣なんて言われた日には…

「あれ、悪い、聞きとれなかつたからもう一度教えてくれないか？」

「はい、新戸先輩の家の隣に引っ越してきました」

きっと、俺の前世は神と敵対していたのだろう。だから、神様は俺に対してこうも悪い状況をセッティングしてくるのだ。そういうば昨日の深夜に隣に車が止まつたような気がしないでもなかつたらなあ。

「そ、そつか… あ、じゃあとりあえず帰るか？」

「はい」

その日の夕方、俺の家に倉山家が挨拶にやってきた。

「お隣に引っ越してきた倉山です」

「御無沙汰します」

「こちらに帰つていらしたんですね」

両親が懐かしそうに話しこんでいる中、俺は隣で固まっている愛夏を見てそつと肩に手を置いた。ちなみに、愛夏は俺の妹ではない。親戚で、俺の妹分みたいなものだ。世界一周に両親が旅だった為、こちらに居候している。

「あ、兄貴…倉山つて…」

「ああ、お前の想像している通りだ」

「よ、よかつたねー、兄貴。お田付役がいなくて寂しかったんじやないの?」

「ははあ、俺だけじゃなくてお前のお田付け役つて感じもするんだよなあ」

「風太郎君、久しぶりだね。ちょっと話をしようじゃないか」

「あ、はい」

千穂父に呼ばれて俺は前へと移動する。愛夏はすぐ引つ込んだ。

「今度ぜひ、夕飯と一緒に食べようじゃないか」

「はい……近いうちに必ず…」

「ああ、千穂の事をよろしく頼むよ」

「え、ええそれはもちろんです」

受け答えが面倒だから呼ばれたくないんだけど、いざれまた呼ばれるんだろうな。

でもまあ、宿命つてやつなのか俺が呼ばれたのは次の日だつたりする。

第三話

「ほらー、朝だよつ。もつつ、あたしがいないと朝も起きれないんじやあたし以外に婿の貰いていなんじゃないの？」

なんて事は絶対に起こり得ない。いや、人によつては起こりえるらしいのだが、俺にとつては妄想の産物でしかない。重ねて言うが、人によつては起こりえるらしい。大切なことなので一回言いました。現実はまあ、女の子が一応起こしに来てくれるからそれだけ見るならいいほつかもしれない。

「新戸先輩、愛夏さん、朝ですよ」

ちなみに、起こしてもらいたい女性像は『立派な年上の女性』である。真面目だが、どことなく小生意気なところのある年下の女子ではない。起こすときにはピンポイントで日光を目に当てるような少女ではないのだつ。

「…眠い」

「兄貴、しうがなによ。起きよつ」

「…わかつた。二人ともおはよつ」

「おはよづ」ぞこめす

「おはよう」

かすかに残る眠気を脳過ぎまで脳内にとどめておくとじよつ。爽やかな朝を迎えることなんて九月じゃ無理だろ。残暑の中日を覚ますなんて暑くて仕方がないんだよ。

「新戸先輩、シャツです」

「おつ」

俺は起きてすぐに顔を洗い、歯を磨き、朝食をとつたあとに着替え、トイレに行つてレツツラゴーというスタイルを取つてゐる。でもまあ、可愛い後輩がシャツを出してきたのなら最初に着替えると言つのもいいかもしれないな。

べたつくパジャマの上を脱いでシャツを着る。

「兄貴、ズボンだよ」

「あいよ」

可愛い妹分がズボンを持ってきたのなら履くしかないだろう。俺はパジャマの下を脱いだとして四つのおめめへと注意を向ける。

「何だその期待した日は?」

「別に何も」

「期待なんてしないよ」

「そうかい、それならいい」

さつさとズボンを履く。一人の視線が俺に新たな趣味を誕生させるかもとちょっとばかり脳裏をよぎる。しかし、あくまで自分がノーマルであると言つ事を教えさせられた。

朝のこまごまとした事を終えて登校。俺と愛夏、そして千穂が三人並んで学校へと足を進める。

「愛夏さんが新戸先輩の家に居候しているとは知りませんでした」

「ああ、愛夏の両親が世界一周旅行に行つちまつて帰つて来ないからな。連絡もつかない相手だし、今頃どこを彷徨つているんだろうか」

「この前はカンボジア辺りから手紙が来てたような気がするけどどうだろ?」

娘の事をほつぽりだして世界一周だから性質が悪い。愛夏が気にしているいようだからいいものを、もしもぐれたりしたらどうするつもりなんだろ? まあ、その程度でぐれるというのも変な話ではあるか。

「寝室は新戸先輩と同じなのですね」

「そだよー、だつて寝る場所がないから仕方がないもん。居候が部屋を要求したらまずいでしょ?」

「確かにそうですね。でも……」

何かしら言葉を続けようとした千穂が前を向いて固まつた。

「ん、どうした?」

「あれ

「え？ あれ？」

指差す方向を俺と愛夏も見る。赤いシートのようなものが民家の玄関から出てきて前に止まつて、いる高級そうな車の後部座席まで続く。

「お嬢様、月一の車登校でござります」

「間山さん、ありがとうございます」

黒髪縦ロールの女の子が一人、家から出てきて一瞬だけ俺たちの事を見た。

「ふんっ」

そういうつてそのまま車に乗り込み、車は去つていく。

「あれは……何ですか？」

「高級車だろ」

「偽物っぽいお譲さまも付属していたね」

考えたところでしようがないので俺は歩き出した。

「兄貴、気にならないの？」

「いや、別に。制服みたところ俺達と同じ高校じゃないみたいだしね。転校生が来るつて言つのも聞いていないから遠い高校だろ」

「そうですね」

もはや興味はないといった様子で千穂も俺の隣にやつってきた。

「新戸先輩」

「何だよ」

「今日の昼休み、先生に頼んでみますのでその時はよろしくお願ひします」

いまいち理解できなかつた。

「何の事だよ？」

「生徒会の事です。詳しい事は昼休みの時に話しますので……愛夏さんもどうですか？」

「え、遠慮しておくよ」

若干笑顔がひきつっている。

ふーむ、そうか、千穂は生徒会に入りたいのか。その時はよろしくお願いしますって、別に生徒会長が絶対的な権利を持つているわけでもないんだけどな。漫画やドラマに出てくるような生徒会長なんて殆どいない。自発的に行動する人なら先生に無理を言えば何とかなるだろう。生憎、俺はそんな生徒会長じゃないからな。

千穂の期待する視線が何を期待しているものなのか、俺にはいまいちわからなかつた。

第二話・わがじ（後書き）

全体投稿数としては前作と同じくらいまでいたらしいですかね。
ま、行かないなら行かないで構いませんがそれなりにがんばります。
前回はほぼ毎日更新してきました。ですが、今作では無理っぽいです。

第四話・仲の良い一人

第四話

午前中の授業が終わったら何が待ち受けているのか……当然、昼休みである。弁当学生は弁当を、食堂学生は定食を、購買学生はパンを奪い合つて腹を満たすのだ。

俺は弁当学生の為に机をくつつけて友人たちと一緒に弁当をつくる。

「なあ、ジュディー」

「ん？ ビーしたの？」

金髪碧眼、美人でスタイル抜群の全男子憧れの的・中州ジュディーに質問することにした。

「毎日中州の弁当作つてるけどやつぱり大変か？」

「ん~そうね、結構大変だけど将来を誓つた秀作の為だもの。苦も楽になるわ」

「ありがとう、ジュディー」

隣にいる中州が頬を染める。男子生徒の間からは『ちつ、ブツ飛ばすぞ』や『中州秀作が浮氣して刺されますように』といった穏やかではない言葉が飛びかっている。

「ふうたるーにはお弁当を作つてくれるような娘、いないの？」

憐れむように、と思うのは俺の心が見せる幻影なのだろう。でもどこか、『どう？私たちはとても幸せなの』といったオーラを出している気がする。

「ん~？ 愛夏が頑張つて作るのとするんだけどな。俺が作ったほうがあつまいから駄目だ」

下手ではない、下手ではないが……自分で作つたほうがコスト面、タイム、見栄え等々、いいのである。

「そついえ、愛夏ちゃんのお弁当を作つてるのは新戸君でしたっけ？」

「ああ、うちの母ちゃん今は朝が早いからな。必然的に自分の弁当も自作だ。あー、クラスのアイドル的な子が俺の為に弁当とかつくつてくれるねえかなー」

俺のこの言葉を聞いた男子連中がまた何か言つてこるよ「うだ……『それはないで』『やる』『中州秀作が浮氣して刺される確率よりひくいで』『やるよ』……お前ら、後で覚えておけよ。

弁当を食べ終えたところで放送が鳴りだした。

『一年A組、新戸風太郎君。職員室まで来なさい。繰り返します……ああ、そういえば呼ばれていたんだっけか。

「会長、女の子が来てますよ~」

「女の子?」

渡りに船とはこのことだ。グッドタイミングで呼んでくれるとはこのままかけおちでもしようかしら。

心を弾ませながら教室の後ろの方を見ると千穂が立っていた。手の早い男子達数名が千穂の周りに群がる。

「ねえ、君何年生で』『やる? 一年生で』『やるか?』

「お金あげるから拙者と遊ばないで』『やるか?』

「お前ら何気持ちの悪い事してるんだよつ。ほら、散れつ」

男子を蹴散らし、千穂の前にやつてくる。

「どうしたんだ?」

「どうした、ではあります。お休みお願ひしてましたではありますせんか」

怒つているようだ。さっきまで千穂の周りにいた男子達も『あの会長に楯突くような女の子は遠慮しておくで』『やる』といつて席についている。

「悪かった

「……早く行きましょう。先生も待っていますから」

ジユディー達に身振りで行つてくるわと伝えて教室を後にする。

「ふうたるーは『このまま海に行つて来る』ってジユースチャーしたに違いないわ

「いや、違いますよ。きっと『このまま峠を攻めてくる』でしちゃう。俺らの心はいつも一つにつながっている……はずだ。

職員室へ行く途中トイレに寄った。千穂を待たせる為、手早く廊下に戻つてみると千穂がいきなり手を伸ばしたきた。

「チャックが開いてます」

「言つてくれれば俺が自分でするつての」

こんなところ他の生徒に見られたら馬鹿つて思われてしまつ。

「あ……」

「ん? どうした?」

「布が噛んでしまいました」

チャックが全部上がりきることなく、途中で止まつてしまつてい

る。千穂は膝立ちになつて噛んだ布を外そうとしていた。

「おい、これはまずいって。俺がやるから離れてくれよつ」

「いえ、私の失敗ですから」

失敗したら絶対に自分の力で何とかしようとするその責任感……残念ながら今は要らないんだ。中学生のときだつて全く同じことがあつたのにまたやるとは成長していない証なのではないだろうか。「せ、生徒会長があんなことさせるなんて……」

「うわ、こんなところで? あり得ないつ」

ああ、ほり、俺に幻滅した女子生徒たちが去つて行つちゃつたじやないかつ。

「終わりました」

「…………ありがとよ」

下手したら次の校内新聞は『あの生徒会長が下級生に対してな事を……』とかやつてくれそうである。新聞部の部長は可愛いんだが、そういうたネタが大好きだからな。普通に『無念! 野球部初戦帰還』とかやつてほしいものだ。まあ、ガードが緩いからいくらか写真でもうけさせてもらつたけど。

「では行きましょうか

「おう!」

他にハプニングが起こることなく、無事に職員室までたどり着く。身なりを整え、職員室の扉をスライドさせる。

「失礼します」

「やつと来たか。お前にしては遅かつたな？」

「すみません、途中トイレに寄つていたので遅くなりました」

俺を呼び出した教師のところまで千穂を伴い歩いて行く。

「それで用事とは何でしょうか？」

「うん、実はお前の隣にいる倉山千穂さんが生徒会に入りたいそうなんだ」

「……なるほど」

千穂はお願いしますとばかりに頭を下げている……俺ではなく、先生に。

「こつちは別に生徒会に入れてあげてもいいとは思うんだがな。生徒会長はお前だ。入れる、入れないにしてもしつかりとした理由を聞きたい」

「ぼく個人としての意見は入ってもらつて構わないと思います。中学生のころから倉山千穂さんは優秀でしたからね……ですが、転校してきて間もない状態で彼女が生徒会の活動に参加するのも如何なものかと思います」

「何故だ？」

なるべく千穂の方は見ないようにしておいた。

「文化祭の準備がそろそろ始まります。放課後、せつかく友人と仲良くなるチャンスを生徒会に呼ばれて潰してしまつと言つのも勿体ないものです」

先生は顎に手を当てて考え込んでいる。

「じゃあ駄目と言う事か？」

「ええ、生徒会には入れないほうが彼女の為になるでしょう」

「納得できませんつ」

両手をグーにして俺を睨みつけてくる。

「まあ、倉山千穂さん怒らないで下さい。まだ話は済んでいません

から

「？」

ちゃんとさつきの言葉に続けようとしたセリフを口にする。

「生徒会には入れられませんが、ぼくが一個人として彼女に手伝つてもらおうと思います。それなら倉山千穂さんが友人と遊びに行くときなどは自由ですからね」

「そうか、回りくどい感じがするがお前がそういうのなら好きにするといい」

「新戸生徒会長、よろしくお願ひします」

「はい、こちらこちらよろしくお願ひします。倉山千穂さん、一緒にいい高校にしましょう」

モテるイケメン生徒会長になりたいものだ。といつことでまずは丁寧な感じを与える口調から入つてみている。

一瞬、そう、ほんの一瞬だけ千穂が普段とは違う『憧れの先輩で嬉しい』みたいな表情をしてくれたのが嬉しかった。

「これでぼくは失礼します」

「ああ、待て。お前を呼んだのはその為だけじゃない」

先生は机の引き出しから一冊の冊子を取り出し、俺に渡したのだった。

第四話・仲の良い一人（後書き）

いまいち面白くないといったのはなんとなくわかります。前作も読んでくれている人があまりいませんでしたからね。まあ、タイトル、内容等で見切りをつける人もいるんでしょう。読者がすべてというわけではないんですけどね。書く側としてはそれなりに意見もらつた方がうれしかつたりするのです。辛口？駄目だし？下手すると感想読んで数日はへこんだりしていますけどね。昔はよく他の作者さんと駄目な部分を教えてもらつたり等の交流があつたのですが、今ではさつぱりです。忙しいというのもありますが…。今回の話の後は数日生徒会室での倉山千穂の仕事ぶりのつもりでしたが話変更で主題となる文化祭の話に移行します。

第五話・しばり

第五話

放課後、今日の晩御飯は千穂の家で御相伴にあずかることになつてゐる。しかし、その前にファミレスに行かなくてはいけない。先生からもらつた冊子には『文化祭連携案』と書かれていた。なんでも近所の女子高がこの高校と文化祭について話し合いたいとのことである。えへへ……女子高かあ……。

「さて、女の子と会つてきますかね」

まあ、残念ながら千穂も一緒に為に変な真似は許されないがな。千穂が自ら先生にお願いし、書記として同伴することである。廊下に出ると既に千穂が待つていた。あれほど昼休み千穂に群がつていた男子どもは千穂の事をまるで見えていないかのように避けたりする。

「行きましょうか

「そうだな」

ファミレスまでそんなにかからぬからな。道中、変な人に会つたりハプニングも起きなかつた。

相手が来ていないので適当な席に座つて待つことにする。

「女子高のことですが」

「それがどうかしたのか?」

「いえ、中学生の頃の新戸先輩とは変わつていいのですが何も心配することはないと思います」

「はは、当然だろ。俺は変わつたんだよ」

変わってないさ。ええ、変わっていませんとも。可愛い女の子がいたらそりや、誰だつて胸がときめきますとも。心のどこかでああ、この子と仲良くなりたいなあととかで……ぐえへつへつく……。

ま、愚痴るわけじゃないんだが高校はいつても俺に告白してくるような相手は当然おらず、たまに話題に出る『誰が好き?』という

ようなことも俺が答える前に『新戸には中学時代に』って感じでいなのはずの千穂が俺の彼女になつてたりする。一時期は千穂が俺の隣にいたとか言う噂が広がつたりもした。

「新戸先輩が成長したとなると少し……寂しいです」

「なんでだよ」

「知つているはずの先輩が少し遠くに行つてしまつたような気がしたので」

「お前切ない事言つねえ」

転校して少しは成長したのだろうか。昔は愛想のかけらも滅多に見せないような奴だったのにな。中学生のくせにやたら大人ぶつていた。

「もう少し真面目にやつてください」

「生徒会長ですから模範的な態度をとつてください」

「しつかりしてください」

ちょっと冗談で後ろから胸揉んでやつたら大声で泣き出しだした。本当、あの時は対処するのが大変だったぜ。

俺が思い出に浸つていると千穂の声が聞こえてくる。

「文通の事ですが」

「今度はそれか?どうしたんだよ」

「最初の方はちゃんとした文章を返してくれていたようですが途中から徐々に字が雑になり、内容も薄くなつてきているような気がしました」

千穂には悪いが忙しかつたのだ。しかし、びつしりと書かれた文字を読んでそれにいちいち返していくのも大変なのだ。段々文章の量も増えていつていだし、俺の文章は最初と同じぐらいのはずなんだけど……思つた以上に千穂が沈んでいるように見えたので謝つておくことにした。

「あ、ああ……悪いな」

「最後の方は絵を描いてごまかしている感じがしました」

結構頑張つて描いたほうである。しかし、お気に召さなかつたら

しい。勝手に描いたら莫大な著作権料を払う羽目になる危険な香りのする黒いネズミとか、勇気と愛だけが友達のあれとか…他にも色々と描いたんだぜ？」

「はつきりいいますが私と文通するのは…嫌でしたか
俺は首を縦に動かした。

「…ですか」

あからさまに落胆しているようだ。

「そうだな。出来れば電話の方が俺はよかつたよ。直接声聞けるし。ま、今はこうやってまた同じ高校に通っているんだからそれでいいだろ」

「相変わらず意地が悪いんですね」

「千穂がさつき『少し寂しい』とか言つからだよ。不満か？」

「…不満ですが、私も今はそれでいいです」

ぶすっとした感じで千穂は外の景色を眺めていた。

「…新戸先輩、來たようです」

「お、そうか」

千穂の見ている景色を見てみると……黒塗りの車が一台、駐車場でバックしていた。

第六話・来てほしい春

第六話

「いらっしゃいませ~」

店員がマニコアル通りの声かけをする。ファミレスに入ってきたのは二人の少女と一人の老紳士。

一人目、黒髪縦ロールでスタイル抜群の高飛車そうな女子生徒。二人目、少しへとんとした目つきで、ちょっとぼっぢやりした感じの女の子……こっちも結構胸があつて見ていて和む。三人目はオールバックの銀髪に細面の初老の男性である。

これで掘みはばつちりとか何とか話しながらこちらの方へと歩いてきた。

「羽津高校の生徒さんですわね？」

「ええ、そうです」

否定するわけにもいかないので素直に頷いておいた。女子生徒二人が俺たちの席の前に座り、初老の男性は別の席で待機していたりする。

「はじめまして……わたくし、第一東羽津女子学園高校の生徒会長、大久保紗枝ですわ」

「東校の書記長である湯河原美穂です」

俺は衝撃を受けた。『ですわ』口調とかこれまで生きてきた中で聞いた事のない語尾である。『つす』とか『でやんす』は中学校の頃マジでいたからな……まあ、女子の知り合いがあまりいなかつたら『ですわ』口調は聞けなかつただけかもしれない。

衝撃を受けている俺の代わりに千穂が自己紹介をしていた。

「羽津高校生徒会の倉山千穂です……新戸先輩、自己紹介お願ひします」

「え、ああ……。羽津高校生徒会長、二年A組新戸風太郎です」

自己紹介を終えて俺は早速本題に入ることにした。さつさと終わ

らせることによつてもしかしたらどうちかの女の子と仲良くなるチャンスがやつてくるかもしれない。声を賭ければいいって?そんな恥ずかしい事出来るなら今頃俺の彼女は一桁を超えている事だろう。「軽く読ませてもらいましたが具体的な説明をお願いできますか」

「湯河原さん、説明お願ひしますわ」

芝居かかつたような指パツチンをやる。すると隣の少女がいつの間にか準備していた書類を読み上げ始めた。

「はい、えーっと、こっちの羽津女子学園高校……面倒なので女子高はそちらの高校と将来的に合同で文化祭を取り行いと思っているのです。ただ、今年からそういう行事をやるのも早すぎるのでも今は裏方に回ると言つ提案をさせていただきました」

「裏方?」

俺の疑問に生徒会長を名乗つた大久保さんが口を開く。

「ええ、わたくしたちの文化祭は約一週間後、そちらの文化祭はさらにその後ですわ」

確かに、予定としてはまだ準備期間がある。しょぼーとこひはしょぼいが、やるところは模擬店まで出すと言つ頑張り具合……というのも、運動会がいいか、文化祭がいいかもめることもあり、決定権は生徒会長が握る事となる。

まあ、運動に向かないようなおテブさん達からのお願いによつて文化祭にさせてもらつた。

「はあ、なるほど」

「ですから、明日からこちに生徒を派遣していただきたいのですわ」

「どういつたことをする予定なのですか?」

初めて首を突っ込んだ千穂はしつかりと話をまとめてくれていたりする。偉い後輩だ。でも、ノートの端に『新戸先輩が女子生徒に目を奪われていた』とか余計なことだぞ。

「主に肉体労働ですわ」

「肉体労働?」

「はい、グラウンドに屋外ステージを作つてもらいたいのです。一週間程度でお願いします」

「……素人の私達にそういうものは出来ないと思いますが？」「わたくしはあなたのようなオチビさんに頼んでいませんわ」「むつとした表情で俺の方を見る千穂。俺が言つたわけじゃないだろ。

向こうの生徒会長さんはテーブルに肘を立てて指を組み、俺の方を見てくる。

「で、返事はどうしますの？」

「わかりました、やりましょう」

千穂が抗議の目で俺を見てくるが…後で説明する事としよう。

「そうですか、それは嬉しいですわ。そちらが文化祭になつた時はこちらからも人数の足りないような場所に人を派遣でどうでしょ？」

？」

「わかりました」

「交渉成立ですわね。湯河原、帰りますわよ」

「はい、失礼しますね」

二人はファミレスから帰つて行く。執事さんが俺たちの飲み物代まで払つてくれたようである。

俺たち一人もファミレスを出て車に乗り込む一人を見送ることにした。

「新戸先輩、なんで出来もしないような事を承諾したのですか？」「なーに、こっちにも考え方があるんだよ」

「考え方？」

「そうだ」

詳しく説明しようとしたところで、湯河原と呼ばれた女子生徒が車から出てきて走つてきた。うん、いい搖れだ。

「すみません」

「何ですか？」

「あの、携帯の番号とアドレス交換してもらいたいんですけど」

「ええ、いいですよ」

「ありがとうございます」

生徒会長をしていて一番嬉しい時である。よかつた、生徒会長になつて。

「ではまた、明日の放課後いつかの高校で会いましょう」

「はい」

俺は黒い車を見送りつつ、何とか頬の緩みを耐え抜いた。

「新戸先輩、明日から大変ですね」

「そうだな。とりあえず体躯のよろしい連中を何人か集めとくとしよつ……千穂はどうする?」

「もちろん一緒に行きます。新戸先輩のお日付け役として」

「…………あいよ」

そういえば朝、黒髪縦ロールのお嬢様を見かけた気がするな。意外と家が近いのだろうか……とりあえず、明日から忙しそうである。

第七話

向こうの要求に応えるため、俺は生徒会で比較的体躯のよろしい面子をそろえた。足りない分は暇そうにしていたラグビー部員で補つていてる。

「まさか女子高に堂々と入れるなんて夢のようす」

「これも生徒会長様のおかげです」

千穂はすでに外で待つて居る為、俺たちもそのまま行かなくてはいけない。だが、その前にやることがある。

「いいか、何かしら指示があつたら絶対に従つよう。たとえ自分の信念を曲げたとしてもだ。もし俺の言つ事をちゃんと聞いたのなら俺からお前らに渡したいものがある」

「了解です。期待します」

俺たちの心は一気にまとまつた。そういうわけで出陣する事としよつ。

現地解散になる為、鞄を持って一列横隊で廊下を歩く。すれ違う生徒たちからは特におかしい視線を受けることなく（ただ結構廊下を占有する為迷惑そうな顔はされた）、校舎の外に出ることができた。

「新戸先輩、そろそろ行かないと間に合いませんよ」

「わかってる。こつちもよつやく準備が終わつたこりだ」

俺の隣に千穂がやつてきたので歩を進める。当然後ろの連中も俺に続く。

町に出てから「反応は様々で、車からわき見する者、足を止める者、曲がり角で俺たちを見かけて回れ右する者といった感じだった。

十分程度で目的の場所へとたどり着く。千穂が連絡していたように校門前には向こうの生徒会長さんが腕を組んで立っていた。

「少し遅かったですわね」

「すみません。これからすぐに作業の方へ移りますので案内してもらいますか」

「ええ、そうですわね。湯河原つ案内しなさい」

「はいはい」

ひょっこりと向こうの生徒会長の影から現れて小さな旗を持つて
いた。旗には『可哀想な蟻ツアー』と書かれている。

「では出発します」

「じゃあ君たちは湯河原さんの指示に従つて行動してほしい。ぼく
はちょっとあちらの生徒会長に提案する事があるから」

「了解です」

「期待してますよ、新戸生徒会長」

「千穂はあいつらの監督をしてやつてくれ」

「わかりました」

一列横隊と千穂を見送ると俺は腕組みしている生徒会長さんに笑
顔で話しかける。

「大久保生徒会長」

「何ですか？」

「こっちの先生方にこの学校の事を説明したいので校内の[写真撮つ
てもいいですか？」

デジカメを取り出して務めて真面目な生徒会長になる。

「いいですわよ」

「じゃあ行つてきます」

くくく、これから俺の『ちょっとやらしくも楽しい女の子たちの
園侵入作戦』が始まるのである。まず攻めるとしたらプール（室内
プールらしい）、体育館、運動場…はいいか。

父親のデジカメを撫でてそれに捉える獲物を想像する。

「さあ、いぢりですわ」

「？」

「初めて来た場所ですから案内するのは当然ですわ」

「あ、あ…確かにそうですね」

まさかこの生徒会長が俺の事を案内してくれるなんてね。『ですわ』とか変な口調しているから常識外れの人かと思ったぜ。

大久保生徒会長の隣に肩を並べて歩くと視線を感じた。

「うわ…」

校舎の窓から沢山の女子生徒が俺に熱い視線を送つてくれていた。好きだから傷つけたい、思い切りぶん殴りたいそんな気迫がこもつているような視線だ。

あまり下手なことはしないほうがよさそうだ。

「大久保さんに校舎内の写真撮つてもらつたほうがいい絵が撮れそうなのでお願いできますか？」

「…いいですわ」

デジカメを渡して運動場の隅をちらりと見やる。そこでは千穂がしっかりと男子生徒たちに命令を下しているようだ。あつちは千穂に任せておけばいいだろう。

「何をぼーっとしますの？」

「え?いや何でもないです」

今日は大人しくしておいた方がよさそうである。いや、隙をついて何か出来るかもしねり。

第八話・大久保生徒会長の旗立て

第八話

大久保生徒会長がまず俺を案内してくれ場所は室内プールだつた。放課後と言つ事もあつて水泳部と思われる生徒たちが練習に励んでいる。

「ここが我が校自慢の一つである室内プールですわ」

「ほお～」

「人がちょうど飛びこんであつといつ間に五十を泳ぎきる。

「速いですね」

「彼女は水泳部のエースですわ」

「あつちで膝を抱いて座つている生徒さんたちは？」

「あれはかなづちの方たちですの」

「泳げないのに水泳部つてことですか」

「いいえ、違いますわ。泳げない方たちを最低限泳げるよう指導するのも水泳部の活動です。溺れない様にすることで水の事故で危険を減らすようとしている我が校の方針ですわ」

それは凄いな。結構いい眺めだし此処を優先的に撮つてもらおうかな。枚数多めでお願いしておこう。

「いち、に、さん、しつ」

「おつほ～：来てよかつた。

「さ、次に行きますわよ」

「わかりました」

名残惜しかつたが次に行くことで大久保生徒会長の後に続く。移動中は特に会話することもない為に俺は思う存分よそ見してかわいい女の子を心の中に残しておくことにした。

「我が校自慢の体育館ですわ」

広いのは当然ながら清潔である。そして女子生徒たちの熱い声が

俺の耳朵を打つ。

「バスケ部とバレー部が使用しているんですね」

「ええ、どの方も優秀ですよ。何せ入部するにあたってテストを受ける決まりになっていますわ」

「テストですか？」

「テストに合格した場合は一軍から、出来なければ二軍から始まって一軍を目指す方式なのです」

「とても大変な道なんだろうな。どうこつたテストをするのが興味はあるが、それより女の子を眺めておくことを優先しておこう。

「あの隅っこで座り込んでいる生徒さんは何ですか？」

「の方は一軍の秘密兵器です。現在のメンツでも十分やっていけますので未だ活躍した試合はありませんわ」

ベンチ要員…。

「あ、ここも写真お願いします」

「わかりましたわ」

記念として（可愛かつたので）秘密兵器の方も写真に写つてもらつて次の場所へ移動となつた。

「この場所が最後ですの」

「え？ もう最後なんですか？」

時間的にまだ余裕があると思つ。三十分も経つてはいない。

「ええ、また明日も案内しますわ」

「そうですか。ではこの部屋は何の部活ですか？」

「生徒会室ですわ」

指を指される先にあるのは『生徒会室』と書かれた表札だつたりする。気が付かなかつたぜ。

「さ、どうぞ」

「失礼します」

案内された生徒会室は俺達の割り当てられた場所とは違つて広くて清潔だつた。まるで応接間のような場所とその奥には仕切りがつて机が並べられている。歴代の生徒会長の写真が飾られていたり、液晶テレビも置かれているようだ。

「今生徒会に所属している生徒は文化祭に向けての準備で席を外していますの」

「そうですか。集合写真も欲しかったですけどじょうがないですね」
きつと美人揃いなのだろう。ちなみにこっちの生徒会はイケメン
がかなり少なかつたりする。

「面白い映像がありますの。見て行かれるといいですわ」

「わかりました」

指定された席に座り、面白い映像とやらを見ることにする。一体
どんな映像を流してくれるのだろう。もしかしてこの学校のプロモ
ーションビデオ的なものだろうか。俺らの高校もそういうものが
入学式のときに流されたりするもんだ。入学した時見せられて俺は
寝ちまつたけどな。

「始まりますわよ」

「はい」

意識をテレビの方へと向ける。秘密と文字が出てきて一瞬だけ俺
の期待を高まらせたが……意外なものが映し出された。

『ふああ～……終わった終わった。中州、ノート貸してくれ』

『生徒会長ですから寝るのはまずいのではないか?』

『ほら、あれだよ。俺は多忙だから寝ちゃつたりするわけさ
隣に座っている大久保生徒会長へと視線を向けた。

「あの、なんでこれが『写っているんですか』

『提供してもらつたのですわ。実に奔放な生徒会長ですね。授業
中に居眠りするなんて信じられませんわ』

「あ、あははは……」

普段は寝ていらないんですよ。偶然、たまたま、ラッキーで寝ちゃ
つたんですと言つのはさすがに憚られた。

『わたくしの周りにはいないタイプですわ』
「すみません」

未だテレビには俺の醜態がこれでもかと映し出されている。しか
し、いつ撮られていたのだろう。

「謝る必要はありませんの。これを機に友達になつていただけると嬉しいですわ」

「ぼく……いや、俺が大久保生徒会長の友達ですか？」

てつくり逆に『こんな生徒会長とは手を組めませんの』って言われると思つたんだけどな。

「敬語も必要ありませんわ」

「でも三年生ですよね？」

「同じ生徒会長ですの」

「はあ、わかりました。えーと、じゃあこれから敬語なしでしゃべります」

「お願いしますわ」

「なんで俺なんかを友達に…どう考へても似合わないと思つけど」

「友達にそう言つた『似合わない』とか壁は必要ないとわたくしは思ひますわ」

うわ、正論言われた。

「わかった。詳しい事は聞かないようする」

「ええ、お願いしますわ。今後わたくしはあなたの事を呼び捨てにしますの。風太郎も紗枝とお呼びになると嬉しいですわ」

差し出された右手を後頭部搔きつつ握り返す。

「お世話になりますわ」

「はあ、こちらこそ…」

その後何故かツーショットを撮つて（どこからか執事がやつてきて撮つてくれた）カメラが返される。

「明日もお待ちしていますわ」

「あ、ああ」

運動場に続く下駄箱でさよならと手を振られて俺も手を振る。周りの女子生徒の視線が怖くて『何、なんで紗枝お姉さまとみんな仲良くしている愚図がいるの?』とか『満月の夜に気を付けることね』なんて聞こえた気がした。気のせいであつてほしい。

第九話・倉山千穂の旗立て

第九話

昼休みは飯食つて昼寝したら無くなつてしまつ。今日も弁当食つて寝ようとしたら中州が話しかけてきた。ああ、そういうば今日はジユディーがいないからか。いつもはいぢやいぢやしながら屋上へと行くんだけどな。

「新戸君」

「何だよ？今日はジユディーがいないから屋上でいぢやつけないから俺といぢやつこいつてか？」

周りの空気がかなり白ける。一部女子が『やつぱり』とか何とか言つていた為に俺はため息をついた。

「で、用件は何だよ」

「倉山の事です」

「千穂の事でどうかしたのかよ。まさか…ジユディーから乗り換えようつて言つのか？」

「いえ、そんな事はしませんよ。ジユディーがいいです」

「千穂が聞いたら怒るだろうな」

「僕はそう思いませんけど。話が進まないので大人しく聞いていてください」

「はいよ」

中州は眼鏡を上げて人差し指を立てた。

「実は倉山がクラスで孤立しているそうです」

「そうか、だから何だよ。たとえ知り合いと言えど友達が出来る出来ないとか関係ないだろ」

「新戸君は生徒会長ですから孤立している倉山をどうにかしてあげるのが筋だと思います」

「はあ？なんだそりや？生徒会長つて言つのは何でも屋さんじやないぞ」

「でも公言していたではないですか。『友達が出来やすいよつな学校を田指します』と

「どうだったかなあ

「参考映像です

携帯電話の画面を押しつけられる。確かにそこには俺が中州の言葉通り発言しているところだった。

「わかったよ

「ではこれからどういった感じで孤立しているのが見に行きましょ

う

やれやれ、お節介め。

一年達のクラスに上級生が行くのもちょっと変だろ。だけどまあ、なじむつて言うのかあまり関心を向けたりはしないもんだ。ちょうど千穂のクラスから出てきた女子生徒を捕まえることにした。

「あの、ちょっとといいかな?」

「はい?」

「生徒会の活動の一環として聞きたい事があるんだ。このクラスに転校してきた生徒がいるよね?」

まつさらな手帳をめぐりながら中州が援護してくれた。

「名前は倉山千穂さんです」

「ああ、倉山さんですか」

「うん、そう、その倉山さんってクラスになじんでいるかな?」

「あまり馴染んでいない感じがします」

彼女のいい方からして『あまり』という言葉は正確じやないだろうな。全然馴染んでいないに違いない。まあ、勝手に判断するのはまずいから慎重に調査しないとな。

「そうか、調査に協力してくれてありがと」

「どういたしまして」

女子生徒がいなくなつたところで俺はため息をつくしかなかつた。

「こりや本人呼んで話聞いたほうがよさそうだな」

「そうですね。これから僕が放送入れてきますので新戸君は生徒会室に行ってください」

「あいよ」

千穂にどういった質問をすればいいのか適当に頭の中で整理してどういった反応が帰ってくるかもついでに想像しておいた。

「面倒です」

「友達なんて必要ないです」

「勉強に関しては先生に聞けば充分です」

もしもこんな回答だつたなら冷めた高校生活を送っているんだろうな。

中州が放送を入れて一分もたたないうちに千穂が入ってきた。

「失礼します」

「早かつたな」

「呼び出されましたから」

「そつか、じゃあ座つてくれ。用件を言つから」

中学の頃は体育会系の女子に引っ張られまくつていたからよかつたんだけきつとこの高校じゃあまり知り合ひはないのだろう。

「転校してきて学校に慣れたか？」

「多少は慣れました」

「クラスには？」

「……いまいち慣れていないと思います」

「友達は出来たか？」

「愛夏さんがいます」

「愛夏以外で」

「中州先輩やジユディー先輩がいます」

「そいつらも除外だ」

「生徒会の方とは友達になりました」

「同じクラスで頼むぜ」

俺の名前が出てこなかつたのが地味に悲しい。

千穂はしばらくの間考えていたようだつたが首を横に振つた。

「こません」

「そうか」

「いまいち友達を作るのは苦手ですか」

「いたほうがいいよな?」

「それは当然です」

「そつか」

青春だねえ。転校してきて友達も出来づらうこと山づらのなら向とかしてあげたいもんだ。

「とりあえずもし話しかけられたらいつもより少しだけでいいから話してみる。自己紹介とかもしただらうし前の場所での生活を話してつてい」

「わかりました」

一生懸命メモしているところなんて可愛い後輩の姿じや ないか。ま、俺の場合は頭の中のメモ帳にしっかりと書きこむからメモ帳なんて不要だけだ。たまに誰かが消してしまつのが問題点だけど。

「じゃあこれから実践してくるといい。まだ昼休みはあるからな」「頑張ります」

「いや、そんなに気張る必要もないけどな…」

両手を握りしめてくる千穂を見ると苦笑いしかできない。

「失礼しました」

「ああ、それなりに頑張れよ」

やれやれ、中州がこんなこと言つて来なけりや今頃寝てたんだけどな……。放課後はあつちの高校に行かなくてはいけないし寝ておきたいんだよなあ。

「……新戸先輩」

「何か忘れ物か?」

いつの間にか出て行つたはずの千穂が戻つてきていた。

「いえ……いや、何でもありません」

そういつてまた出て行つてしまつた。一体何だつたんだらうか。

その日の放課後、千穂は俺に『友達に誘われたので今日は参加できません』と言つてきた。友達出来るのすごく早いのね……俺なんて誘つたその日は断られたりしてたんだぜ。

第十話・肩すかし

第十話

千穂がいないと言つ事で俺が野郎共の指揮をとる一日田。 「ちゃんと足場がくつついているか危ないから確認してくれよ」

「ラジャーつす」

「千穂ちゃんは今日いなっすか?」

「千穂は新しく出来た友達に誘われて遊びに行つたそつだ」

「そつっすか」

「一日田だと言つのにそれなりの足場が組めてきた気がする。これなら明後日ぐらいに野外ステージが出来そうだ。」

「そついえば会長」

「何だ?」

「昨日はここの生徒会長さんと案内されてどこに行つていたっすか?」

「校内を案内してもらつていたんだよ。カメラ持つてな」

昨日家に帰つてデジカメの中身確認したんだけど俺の期待するような下からの視線的なものは期待できなかつた。まあ、健康的なスボーツ少女っぽいのは撮れていたけどな。

「さすが会長ですね。手が早いっす。見せてくださいっす」

「ほれ」

他の作業中の生徒たちも手を休めてデジカメに群がる。俺が言つのもなんだけど、気持ち悪いな。

当然、連中の想像していたものと違つものが写つてゐる為に反応はいまいちだ。

「なんだかがつかりつす

「残念つす」

「作業に身が入らないっす」

「あのなあ、いきなり刺激的なものは身体に毒だろ?だから最初は

刺激の少ないものを選んだんだよ

「なるほど」

「色々と考えているつてことですか」

やたら感心しているがこんなところ大久保生徒会長……いや、紗枝に見られたら何と思われるのだろうか。せっかく出来た綺麗な女子の友人がいなくなるのも寂しいものである。

今日も校内を案内してくれるつて言っていたけどお付きの者（たしか湯河原さんだったかな）がいには今日は用事があると言つ事で学校にいならしい。

女子高にいると言つのに作業中一度も女子生徒に会つことがなかつた。たとえて言つならホラー映画で最後までお化けの類が出ずになつわつた感じだつた。

あさつて辺りに出来るだらつと思つていたけビリの調子なら明日にはできるだらつ。

「会長、もうちょいで完成つすね」

「そうだな。あとはパネルみたいな奴をステージの上に敷いて完成だからなあ」

「まさかこんなに早く終わるとは思わなかつたつす」

「だなあ。俺は湯河原さんに報告していくから今日は解散だ」

今日もいい汗かいたなーとかいいながら帰つて行く生徒を見送る。

「さて、生徒会長の押し事でもしてくるか」

報告する為生徒会室へと足を向ける。つーむ、さつきは女生徒に会いたいとか言つていたけど今度は会いたくないんだよなあ。なんで男子がいるの？つて視線が痛いんだよ…下手したら通報される恐れがあるし。

女子高でそんあハプニング起こすのも楽しいかと思つたけど特に何もなく生徒会室にたどりついた。

「すみません。湯河原さんいますか？」

「はい、どうぞ~」

「失礼します」

生徒会室に入つて本田の作業が完了した事を伝えた。

「明日ぐらには終わりそうです」

「やうですか、それなら練習とかでも使用できますね。ありがとうございます」「やれこます。この事はちゃんと大久保生徒会長に伝えておきます」

「じゃあぼくはこれで失礼します」

「礼し、生徒会室を後にする。

校舎を出るまで結局女子生徒に会つ事もなく（声は聞こえるが廊下では会えなかつた）校門に出てからやつと女子生徒の後ろ姿が見えたぐらいたつた。

「……帰るか」

「いか店にでもよつてお菓子を買おうと思つた矢先、見知つた後ろ姿を見つける事が出来た。

「愛夏」

「あれ？ 兄貴？ ああ、やういえば女子高でステージ作つてるんだつけ？」

「やうやう、ここから近い場所だな」

「ふーん、やつぱり女の子がいつぱいだよねえ？」

「いや、放課後女子生徒見かけたのお前で三人目だ」

「……女子高だよね？」

「余つとは限らん」

「運ないね」

「運があつたら今頃ドロドロの二角関係で苦しんでいる頃だらうよ

俺にそんな運があるとは思えないけどな。

「愛夏はちょうど帰りか？」

「うん、友達の家によつて帰つたからちょっと遅くなつたんだよ」

普段も一緒に生活しているが朝はともかく帰りは一緒に帰る事が少ない。愛夏は一応部活に入つてゐるんだが幽霊部員と云つ奴でさぼつてばっかりだ。

「あ、そうだ兄貴～」

「何だよ？」

「今日おばさん帰つてくるの遅いから何処かで食べて帰らうよ」「あんな、愛夏……お前もお小遣いをもらっているからわかるだろ?今月は厳しかったから大人しく家で俺の手料理だ」

「……あ、じゃあ愛夏が作つてあげようか?」

愛夏が料理を作ると後片付けが面倒である。まあ、たまにはいいか。

「よし、頼んだ」

「頼まれたよ、兄貴つ……それで何が食べたい?」

「……愛夏の得意料理つて田玉焼きだつたよな」

「うん」

黄身がつぶれる確率三割といつ意外と高確率な腕前である。

「卵のサラダも作ろうか? ゆで卵を入れてさ」

ゆで卵を作るとかいってレンジの中にラップでまいた生卵を入れた時はマジでびっくりしたな。下手したらレンジが壊れていたかもしがれん。

「まあ、愛夏も成長しただらうからな。お前に任せよ」

「うん、頑張るよつ。お袋の味つて言つて見せてあげるよ」

その日の晩御飯、俺の前に出てきたのは黒ずんだ魚の焼き物と味噌を直接ぶち込んだ味噌汁だった。きっと、母さんがこれを食べたらい愛夏に料理を教えることだらう。

第十一話・生徒会長、来たる

第十一話

上つ面の友達なんて腐るほどいる。普段はあまり話もしない仲、つまりは知り合い程度の関係なのに困った時になつたら『友達だろう?』といつてすり寄つてくる奴だ。そんな奴とは付き合わないほうがいい。

「風太郎、遊びに来ましたわ」

そして…その逆もいる。別にこつちはそこまで仲良くない関係だと思つていたら向こうにとつては親友と思つてているようなそんな人…俺の思いすごしならしいけどな。

「あの、大久保生徒会長」

「もう…紗枝と呼んでいいと言いましたわ。お忘れになられてしまつたの?」

「いやまあ、周りの生徒の目もありますから」

誰だ誰だとクラスメートたちが視線を向けてくるので対処に困る。こつちの醜態をさらすのは後の文化祭で十分だらう。

「ふうたるーの友達?」

「そうだ」

ジユディーがクラスの総意みたいな事を聞いてくる。中州がトレに行つていたおかげでよかつた。あいつは余計な事を言い出すからな。

「大久保紗枝。俺がいま放課後に行つている女子高の生徒会長さんだ」

「はじめまして皆様。大久保紗枝とりますわ

男子からは高嶺の花を見るような視線が、女子からは羨望と嫉妬の入り混じつた視線が向けられる。

「それで今日はどうしたんですか?」

「ちょうど近くを通りかかつたものでお邪魔しましたの」

「そうですか」

「何だろ?... 背中に眼なんてないんだけどクラスのみんなに見られている気がする。」

「此処じゃ何ですかから生徒会室に行きませんか?」

「ええ、いいですわよ」

彼女がにこっと微笑むだけで卒倒する男子生徒が数人。その中に彼氏がいたようでジョラシー全開の女子生徒が一名。これが大久保紗枝がクラスにもたらした被害である。

速やかに生徒会室まで案内してお茶を出す。

「粗茶です」

「敬語はやめてくださいと助かりますわ」

これから何を話そーかと話題のタネを頭の中で拾つ事にする。まあ、共通の話題は文化祭のことぐらいしかないかな。

「紗枝のところの文化祭はもうちょっとだな」

これに確実に乗つてくるだろう。いや、乗つて来ないはずがないと思っていたが駄目だった。

「風太郎」

不満そうな顔をこすりに向けている。

「何?」

「今日は生徒会長としてこの学校に来たのではありませんわ。風太郎の友人としてこの学校に来たのです。話題を提供してくださるのなら風太郎関係にしてくれると嬉しいですわ」

「俺の事?」

「ええ、わたくしと風太郎は友達と言えどあまりお互いの事を知りませんもの」

知りませんとか言いつつ盗撮していたりするからな。俺の事は全部知つていてもおかしくないはずだが向こうが望んでいるのならこうすることにしよう。

「いまいちわからんんだけど」

「では普段放課後はどのような事をしていますの?」

「放課後？生徒会の活動以外で？」

「ええ、もちろんですわ」

「そうだなあ…」

「普段何しているだろ？」

「…買い物とかかな」

「買い物？」

「夕飯は俺の担当が多いからその材料を買いに行くんだよ」

愛夏は芸術を俺に食べさせようとするからな。あれは食べるものではなく現代アートに応募すべき作品である。

俺の通っている高校には一人暮らしをしている生徒も多いわけでそんな連中（男女問わず）とはタイムセールで闘う事になる。中には人参の貸し借りや豚小間切れのやり取りが行われていたりするのだ。

「風太郎は料理が出来ますの？」

「少しばな。もちろん俺の母さんが作ったほうがうまいんだが…妹分が作るよりも俺のほうがうまいんだよ。紗枝の家はやっぱりあの執事さんみたいな人が作るんだろ？」

「違いますわ。カップ麺を食べていますの」

「およそ想像できない言葉が返ってきた。

「え？」

「以前は確かに付きの者が料理を作ってくれていましたわ。でもほんの少し前にお母様たちと喧嘩をしてわたくし一人暮らしを始めたの」

「そう…なの？」

「カップ麺もおいしい物が多いので何も困ってはいませんわ」

「ずっと食べてると身体に悪いんだぜ？」

「それはわかっていますわ。わたくしとて女ですもの。社会は『男女平等』と唱えていますけどやはり料理は人として出来ないといけません。料理のお勉強もしているのですがこれがなかなかどうしてうまくいかないんですの」

困ったものだとため息をつく紗枝に料理を教えてやりたいもんだ。

残念ながら俺はそこまで料理がうまいと言つわけではない。

「じゃあ俺の家に晩御飯食べに来るか？」

「え？」

「冗談で言つたつもりだった。

「いいんですね？」

「あ、ああ…冗談だつたんだけどな。来たいんなら来ていいぜ」

「じゃあ今日から来ますわ」

「お嬢様、そろそろお時間です」

いつの間に現れたのか知らないが生徒会室の扉のところに執事っぽい人が立っていた。

「楽しい時間はすぐに過ぎてしまうのですわ。では今晚風太郎の家に行きますわ。場所は知っていますから安心なさって」

「そうなのか」

「ええ、相手の生徒会長の情報を湯河原に調べさせましたわ。もちろんプライベートについては一切調べていませんから安心していいですの」

住居はプライベートに当たるのか、当たらないのか考えていると紗枝が生徒会室から出て行こうとしていた。

「じゃあ気を付けてな」

「はい、ではごきげんよう」

廊下を曲がって姿が見えなくなつたようなので振つていて手を下す。紗枝の消えた曲がり角から千穂の姿が見えた。

「大久保生徒会長が来ていたようですがどうかしたのですか？」

「ああ、あんなお嬢様っぽい感じがするのに晩御飯は色々と大変らしいぜ」

「？」

「いまいち千穂はわかつていないうだ。多分、これだけでカップ麺に行きつける人はいないだろつ。

第十一話：一步手前の招待

第十一話

気が付いてみれば明日は紗枝の学校の文化祭。月日が立つのは早いねえ、爺さんや：なんて言つてゐる場合ではない。

「俺たちがやる事つてもう無いよな

「そうつすね」

文化祭一日前は来なくていいと言つてゐた。しかし、いざ帰ろうとしたら紗枝から電話があつて呼ばれたのだ。

校門辺りで待機するのも目立つので結局敷地内に入つてもはや定位となつてゐるステージ付近へと集まる。既にステージではリハーサル等で使用されている為、この学校の生徒……すなわち女子生徒が結構いたりする。

「なんだか目立つすね」

引き連れてきた男子生徒のうち一人がそういう。他の生徒も頷いている。

「そりやそりや。ここは女子高だし、俺たちを呼んだ人物がいない：拳句の果てに理由もわからずじまいだ」

千穂は友達と一緒に遊びに行つてしまつてゐる為いない。友達が出来た事はいいことだ、連日申し訳なさそうに参加できないと言つて来る事も良しとしよう。

しかし、男子生徒どもが此処について千穂がいないことに気づくと『会長ドンマイです』と嬉しそうに言つてくることは絶対に許せない。

い。

「あのー」「はい？」

男どもを睨みつける視線をすぐさま取り消して生徒会長フェイスで微笑みかける。視線の先にはショートカットの可愛い女子生徒が頬をピンクに染めて立つていた。

「あ、あのっ、えーと……大久保生徒会長が新戸生徒会長さんに生徒会室に来てほしいって言つていきました」

「そ、うなんだ。わざわざ伝えてくれてありがと」

「そ、そんな……と、とんでもないです。新戸生徒会長と話せて、私…嬉しかったです」

そういうて女子生徒は走り去つてしまつた。

「こほん、みんな……どうやら俺達の『奉仕は彼女たちの中で評判になつてゐるようだな』

野郎共は首を何度も頷かせている。会長に続けと鼓舞している者までいる。

「何か手伝つてほしい事はないか、困つてゐる人はいかがどうか探すように。俺はこれから生徒会室に行つて来るからな」

「合点つす。ご武運を」

「お前らもな」

皆が敬礼をして俺を送り出す。俺も一度敬礼し、生徒会室へと向かうのだった。

既に俺の顔が売れているのか、それとも元から人氣があつたのか定かではないが女子生徒たちが挨拶をしてくれるようになつた。

「失礼します」

「風太郎、いらっしゃい。本当は直接わたくしが案内しちゃうと思つていたのですけど見ての通り忙しいのですわ」

縦口ールはそのままに髪の毛を後ろに縛つてゐる。紗枝が持つているものは比較的大きめの段ボールだった。

「これが片付きましたら説明いたしますわ」

「じゃあ手伝うよ」

「そうですわね。お願ひしますわ

持ち上げるとそれなりの重量。きっと紗枝だつたら重たいだらうな。

「これさ、何が入つてるの?」

「パンフレットとか学校紹介の書類ですわ。文化祭に配るんですの

「ふーん」

「湯河原さんは？」

「湯河原は別の場所で動いてもらっていますわ」

そんな作業を続けて十分程度。ようやく箱も残り少なくなってきた。

「もう少しですわね」

「そうだな」

結構いい運動をしたもんだ。暑くなってきたんだけど紗枝はそんな素振りも見せていない。羨ましいものだなーと思つていたら実は疲れていたようだ。

落ちていた一枚の紙切れ（文化祭のお知らせ）を踏ん付けて派手に転んだ。

「……大丈夫か？」

「え、ええ……」

右足があらぬ方向に一瞬だつたけど曲がっていた。立ち上がるうとする紗枝の肩を押して座らせる。

「な、何ですか？」

「間違いなく足を捻つてる。立たないほうがいい」

履いていた物を脱がせて靴下も取り去る。足首に少ししふれただけで紗枝の顔がしかめつ面になつたのでほらなと咳く。徐々に腫れてきているようだ。

「こりや保健室行きだな。保健室つてここから近いのか？」

「別にわたくしは大丈夫ですわ」

再び立ち上がるうとする紗枝を再び座らせる。

「安心しろよ。残りは俺がやっておくからさ」

「でも……」

「さ、じゃあ運んでいってやるから動くなよ」

おんぶは駄目だ。紗枝のスタイルは平均的高校生より数段上で人が人相手によからぬ事を考えると言う駄目人間になりかねない……となると、一度でいいからやつてみたかつたあれで行つてみようと思う。

「よつと」

「あ、あの……」

いわゆるお姫様だつこ。小さい頃は近所のおつちゃんたちによくされていたもんだ。まあ、肩を貸せばいいとかそういう野暮なことはなしだ。

「恥ずかしいですわ」

「大丈夫、俺も恥ずかしいから」

保健室に到着するまで誰にも会いたくないもんだと廊下に続く扉を開ける。

「……皆様どうしたんでしょうか？」

「え、えーと……」

紙コップを肩耳にあてたこの学校の生徒さん達がかなりの数いた。「大久保生徒会長が殿方と一緒になつて襲われないかと……皆で警戒していたのです」

集まつていた面子の中でも比較的真面目そうな女子生徒が真面目ぶつた表情で……その割には顔を真つ赤にしている……答えてくれた。

「あ、あなた達……早くお散りなさいつ」

羨ましそうな視線を投げかけていた生徒たちはその言葉に従つて何処かに行つてしまつた。でもまあ、逃げ込んだ教室の中からこちらを見ているからあまり意味がないと思う。

「最悪ですわ」

「悪いな……出来るだけ人に見つからないよう保健室に行つてみる」

「……お願いしますわ」

いついう時に限つて運は俺に味方してくれない。女子生徒たちが

一列きれいに並んだ廊下の真ん中を（保健室は「じゅうじ」と書つて板を持った生徒もいた）通る羽目になつた。

「……」

「……」

もちろん、紗枝はおろか俺も顔が真つ赤である。中には写真を撮る者もあらわれていた。多分、この学校の新聞部とかそこら辺だろう。……うちの学校と同じような顔をしているから間違いない。

「お疲れさまでした」、はい、みんなかいさーん

俺が保健室にたどりつくと同時に生徒たちは文化祭に向けての作業に再び取り掛かり始めたようだつた。

「……すごいな、こここの生徒たちは」

「恥ずかしい真似をさせて申し訳ありませんわ」

「気にするなよ」

保健室に入り、近くの椅子に座らせようとすると紗枝の手が俺のシャツを掴んでいた為に離れなかつた。

「紗枝、手を放してくれ」

「あ……はい」

「あら生徒会長さんじゃないの。男を連れてどうしたの？」

人のよさそうなおばさんだ。恰幅が良く、理想の保健室の先生だつたりする。

「あの、足を捻つてしまつたようなんです」

「あらあらそうなの？じゃあこっちで面倒見るわ」

「お願ひします。僕はまだ用事があるんで失礼します」

「風太郎っ」

「何？」

もしかして支えていた手が胸を触つていたとかそんな事を言つた。どうか……。

「な、なかなかいい乗り心地でしたわ」
珍しくふいとそっぽを向いた讃辞である。いつもならズバッと言つてくれるのにな。

「乗りたいときはいつでもどうぞ、生徒会長さん」

「冗談言つてみたつもりだったんだが紗枝は顔を真っ赤にして俯いてしまった。うーむ、反応ないと恥ずかしいんだけどな。」

結局、俺たちがなぜ呼ばれたのか聞きそびれてしまった。紗枝は夕方俺の家にやってきて病院にまで行ったと説明してくれた。しつかり夕飯を食べて帰ったところを見るとほど気に入ってくれたようだ。家にまでわざわざ来ていたというのに聞き忘れていた俺も馬鹿だけどな。

第十二話

紗枝の学校の文化祭当日は土曜日（俺たちの学校は何故か金曜）だったりする。以前は一日間にわたってやっていたそ�だ。今では一日限りと言う事で一般のお客さん（特に男性客）も多いらしい。補足としてだが、数年前にナンパが原因で一年生の子と客の間で色々と問題が起きた為に声かけ等は学校側から禁止されている。そういう言つた行為に及んだ者は問答無用で警備員から締め出されるのである。

「会長っ、生徒に手を出す輩を閉めだしてきてやつたっす」

「会長、こっちにもいましたから同じく締め出してやりましたっす」「まさか本番当日に警備の仕事を担当させられるとは思わなかつたな」

開始一時間前に俺たちは呼び出されて警備の仕事を担当させられたのである。制服支給とか（恐ろしい事に個々に手渡された制服はピッタリのサイズだった）最初から言つてくれればよかつたのに……多分、昨日言おうとしていた事は警備の事だったに違いない。

一応警備員の人たちも別にいるにはいるが、やはり人は多いほうがいいだろう。俺の仕事は作戦本部、この学校の生徒会室にて今回の手伝いについての意見感想をまとめ上げることだつたりする。千穂がいたら代わりに書いてくれたかもしけないけど生憎彼女は愛夏や友人と一緒に文化祭を楽しんでいる事だろう。

入れ替わり立ち替わり入つてくる生徒（警備員）の報告を受けたり、紗枝を求めてやつてくる女子生徒達の相手をしなくてはいけない。どうやら紗枝はこの学校のアイドルのようなものでもあるそうだ。やつてきた一人の少女の話によると一緒に思い出の「写真を撮るとか何とか……俺も複数の女子生徒のカメラに収められたりする」「だるいなー」

時計を見ると既にお昼時。なるほど、だから校内が静かになつて
いたのか……みんな腹ごしらえに向かつたと言う事だらう。

この生徒会室は作戦本部と言いながら警備員の生徒たちが向かう
場所は可愛い生徒たちがいる模擬店だ。誰も人がいないこの場所に
来る人等稀だ。あちらの生徒会の人があつても俺の顔を見て『失礼し
ましたつ』といって出て行つてしまつ。

どこで食べようかともらつたパンフレットを確認していると紗枝
が生徒会室に入つてきた。

「風太郎、書き終わりましたの？」

「ん、まあ、それなりに」

「歯切れが悪いですわね」

「もうちょっとで終わる。これは間違いない」

俺が妥協したら終着駅である。清書は家でやればいいし、とりあえず昼飯を食べることにしよう。

「紗枝はもうお昼済ませてきたのか？」

俺の問いかけに對して答えとばかりに一つのコンビニ袋のようないい匂いがしてくるとこりを見ると出来たてのものを見せてくる。いい匂いがしてくるとこりを見ると出来たてのようだ。

「それがお昼か？」

「ええ、風太郎と一緒に食べようと思いましたの」

「そつか、じゃあ片方もらつてこいんだよな？」

「構いませんわ。さ、どうぞ」

「ありがてえ、金は？」

「結構ですわ」

「そつか、じゃあありがたく頂戴するぜ」

差し出されたほうの袋を覗く。たこ焼きとたい焼き、ホットドッグ
が入つていた……たい焼きはお昼としてどうだろうか。

とりあえず紗枝の隣に腰掛けホットドッグに食らいつぐ。

「久しぶりですわ」

「何が？」

「 いつやつて誰かと一緒にお昼を食べること……ですわ」

紗枝の方は幕の内弁当だった。そつちの方が良かつた……

「 一緒にお昼食べる事つて……普段一人で食べてるのかよ？」

「 ええ、特別授業で少し遅れてしまいますが。教室に戻った時は皆

さん既に食べ終わっていますわ……必然的にわたくしは一人、です

から生徒会室で一人で食べていますの」

「 そこはやっぱり『一人で食べて大変なんだな』って言つたほうがいいのか？」

「 そうですわね……いつその事風太郎がこちらに来てくれればいいやつて毎日一緒に食べてくれるんでしょうけど……残念ですわ」

「 冗談で言つたつもり……だよなあ。だつてこの学校女子高だし、俺が転校しなくてはいけない時あれを切斷しないといけなくなるんだろ？」

「 しかし風太郎も残念ですわね」

「 何が？」

「 いつやって部屋にこもつていては文化祭を楽しめないですわ……生徒会長だった事を後悔してはいませんの？」

そういう質問をするという事は生徒会長だと言つ事が嫌なのだろうか……

「 紗枝は生徒会長嫌だったのか？」

「 少しだけ嫌ですわ」

「 そつかそつか」

きつと俺の顔は今頃にやけていることだらう。一つ、意地悪な質問を思いついたのだ。

「 紗枝は俺と知り合いになつたことも嫌だったのか」

「 そうですわね」

思いつきパンツで……いや、パンチで殴られた気分だぜ。

「 え、ま、マジで？」

「 冗談ですか」

「 冗談かよ……」

「ええ、風太郎が意地悪な事じょうとしたお返しですわ……お見通しですの」

「やれやれ」

たい焼きもせつせと口にする。残りはたこ焼きだけになった。

「あんまり知り合つて長いってわけじゃないけどまさかここまで話せるようになるとは思えなかつたぜ」

「わたくしもですわ」

夕飯一緒に食べたりしたのも大きいかもしれないな。結構付き合いやすい性格してるし、おかしいのは口調だけっていうのも大きい。しかし、持つてきてくれたたい焼きかなりおいしかったな。

「一つ、風太郎に申し上げなくてはいけない事がありますわ」

「ん？」

たこ焼きをせつせと口に放り込む。ハツ入つていて残りは五個といつたところか……残り少なくなつてると慎重に食べ始めちまうからな。

「わたくし、あさつてには転校しますの」

「悪い、聞いてなかつた何だつて？」

「……今度、転校しますの」

持つていたたこ焼きを落としそうになつた。だが安心して欲しい、寸でのところでしっかりと守つて見せたから。

「じゃ、じゃあこっちの文化祭協力はないつて事になるのか？」

「わたくしのポストには湯河原が付きますから安心して欲しいですわ」

顔は伏せたまま、決して俺の事を見ようとはしていなかつたりする。

「こっちの文化祭には来てくれないつてことかよ……というか、いつから転校するつてわかつていたんだよつ」

肩を掴んで揺さぶつた俺は紗枝の表情を見る事が出来た。

「ふつ……あはははつ、冗談ですか」

「はあ？」

何と言われたのかいまいちわからなかつた。

「冗談かよ」

「どのような反応をしていただけるのか気になりましたの……嬉しいですわ、そこまで入れ込んでいただけているとは思いませんでし

たわ」

そのまま認めるのも何だか嫌なので一応言い返そうとしたが残念ながら放送が流れ始めた。

『大久保紗枝生徒会長、至急生徒会室まで来てください……繰り返します……』

「呼び出しだしてこれで失礼しますわ」

「ああ、行つてらつしゃい」

「風太郎、戻つてきたら一緒に文化祭周りますわよ」

「わかった」

それまでには多分俺の仕事も終わつているはずだ。ま、すぐに帰つてくるかもしれないから準備だけしておくとしよう。

第十四話・後の祭り

第十四話

ソファーに背中を預けていたつもりだつたんだ。気が付いたら寝ていた。現在時刻四時四十九分。夕焼けが普段より早く俺に顔を見せてくれている。

「起きましたの？」

俺の顔を覗き込んでいるのは紗枝である。

「ここにいたなら起こしてくれればよかつたのに」

「気持ちよく寝ていたようでしたのでそつとしておきましたわ。でも、少しだけいたずらしましたの」

「悪戯……ねえ」

顔に何か書かれたのかと（頭に肉か、愛のどつちかだらうか米かもしれん）鏡に写して見たけれど特に何もなかつた。

何だ、冗談かよ……。

「文化祭終了って何時だっけ」

「五時半ですけど五時が一般の方の終了時刻ですわ。例年通りなら片づけは五時からですわよ」

時計を確認しながらそう言つ。俺もついでに時計を見るけど変わりはしなかつた。タイムマシンが欲しい。

「……終わった……俺、なんで寝てたんだよ……」

中州は俺の家にやつてくるとたまに眠る。人の家でぐっすり眠れるなんて信じられないんだが……まさか、家でも何でもない学校で、しかも女子高で眠つてしまふなんて俺は何を考えているのだろう。そんなに落胆しなくとも大丈夫ですか

「だつてもう終了だる。片づけ、始まるつて言つたじゃないか」

「片づけと一緒に回りますわよ。サボつている生徒にはお仕置きしないといけませんの。それに少しなら雰囲気を味えますわ

「そつか、わかつた」

生徒会室を一人で出るとそこには紙コップをもつたこの学校の生徒たちが立っていた。各自、文化祭の格好（侍、ウェイトレス、お化け、ナース etc.）で一生懸命聞こうとしている姿だった。

「……

「オー、これは失礼しました～」

「ジュディーまで……」

その中には中州とジュディーが混じっていたりする。俺と目が合うと中州は手を挙げた。

「お邪魔虫は移動します」

中州のこの言葉で蜘蛛の子を散らすかのように生徒たちはいなくなってしまった。おしい、一分後だつたら全員お仕置き対象だったのに……

「片づけをきちんとしてくれているのか心配ですか

「……真面目だなあ」

ま、こんな美人と噂されるなんならいい事だらうけど紗枝にとっては迷惑になるんだろうな。

「風太郎」

「何だ？」

「今日はしつかりあなたの小さな相棒さんに許可をもらつてきていますわ

「許可？」

「つて、小さな相棒つて誰だらうか？一昔前にあつていたマイクロマネ」

俺の疑問に胸を張つて紗枝は笑っていた。

「ええ。今日一日風太郎はわたくしの相棒です。残念ながら殆ど一緒にいる事は叶いませんでしたわ。これも生徒会長の宿命ですね」

「すまん、俺が昼から寝ていたのも原因だ」

「いいんです。風太郎にはちゃんと復讐してあげましたわ
悪戯っぽく笑っている紗枝に俺はどうする事も出来ない。何せ顔

に何かされたわけじゃないし、身体の方も大丈夫だ。

「さ、時間は有限ですから行きますわよ」

「お、おう」

紗枝に腕を掴まれて残り時間少ない片づけを周る。さぼっている生徒は特に見当たらず、各自一生懸命片づけをしている為に特に指導する必要なんてなかつたが、中には売れ残った物を俺達に渡してくれる優しい生徒さん達もいた。

後はステージの片づけを見てくるだけだろうか。組立ての方は結構時間がかかつた気がしたけど、俺たちが行くころには殆ど片づけられていた。

「片づけ、早いな」

「ええ、暇な生徒さんも手伝ってくれているつす」

指さす方には和気藹々と片づけをこなす我が校の生徒とこっちの生徒さん。

「そつか」

「もう終わるんで会長も帰つて構わないつすよ」

さあ、手伝わない人たちはどういたどいたと言わんばかりの態度である。実際、手で追い払われていたりする。

「これで終わりかな」

「風太郎、最後に屋上に行きますわよ」

「屋上……？ああ、わかった」

屋上まで何か設置していたのか。うーん、冷静に考えて放送機具とかだろうけどそういうのはすでに片づけているんじゃないだろうか。

二人して階段を黙つて昇る。おかしい、どう考へてもこの階段は人が通つたような跡がないし、見えてきた屋上へと続く扉は厳重に鎖で幾重にも巻かれているじゃないか。

「なあ、紗枝：扉、閉まつてるぜ？」

「大丈夫ですか」

鍵を出して当然ながらあっさりと解錠。鎖が重たい音をたてて踊

り場に落ちた。

「さ、どうぞ」

「ああ……」

扉の奥は日の沈みそうな開け放たれた屋上だ。俺の予想通りそこに文化祭関係の物が置かれているわけもなく、人が来たような形跡も一切ないような場所だった。かすかに生徒たちの声がグラウンドの方から聞こえてくる。

「この場所に来たのはわたくしが入学して以来ですわ」
紗枝は転落防止用のフェンスを掴んでそいつた。

「そうか」

「以前の生徒会長から鍵をくすねたんですの
「なんで鍵なんて盗んだんだ？」

他の話を振ったところで『空氣読めよ』といった視線が帰つてくること間違いなしだろう。

「一人になりたかったんですの」

楽しそうなグラウンドを眺めながら、実に寂しそうに紗枝はため息をついた。

「詳しい事情は教えてくれるのか？」

「……そうですね、口づけを交わしてくれたら考えますわ

「そうか、じゃあ口づけさっさとするから教えてくれ。

「おい、本当にいいのかよ？ 口づけってキスだろ」

既に準備は整っている。というか、それとなく肩に手を回してしつかりと紗枝の両目を見て話していくりする。あれか、これはこのままあーなつてこうなつて穏やかな家庭を築いてあの頃はーとかソファーで仲睦まじく語る誰もが望む一步ではないだろうか。

「お、俺でいいのかよ？」

「ええ……」

じゃあ遠慮なくいつきまーすと言わんばかりに顔を近づけようとしたんだが、済んでのところで紗枝の手に阻まれた。

「残念……時間が来てしまいましたの」

「時間？」

それがもし、擬音を立てていたのなら『ひゅるるるー』ではなく『ズキューン』だつただろう。俺の後頭部に勢いよくぶつかつたのは缶コーヒーだった。

「いてえな

「……」

緑茶の缶を持った千穂が面白くなさそうに立っていた。俺を一瞥すると緑茶の缶をこつちに投げてきて何処かに行ってしまう。

「いつかまた、こうして一人で空を眺めたいものですわ」

「あ？ ああ…… そうだな」

千穂もいなくなつたしさつきの続きを……と言つわけにもいかないようだ。紗枝の見ているのはどの部分かと一生懸命目線を追つていると話しかけられる。

「風太郎」

「何だ？」

「風太郎は最高の友達じやありませんけど」

「悪かつたな」

「特別な友達ですわ…… た、 そろそろおりますわよ。教師に見つかつたら説教されますの」

「ああ」

一人になりたかった理由は後日聞くことにしよう…… その日は普通に紗枝といつものように別れた。

数日後、じつちの文化祭の件について相談しようと紗枝の学校に行くと生徒会長の名前が湯河原さんに変わっていた。湯河原さんの話によると紗枝は転校したことだった。

第十五話・相談

第十五話

俺らの文化祭が始まるまで約一週間。湯河原さんとの話し合いも終えて、帰宅ついでに生徒会室のゴミ箱の中身を捨てに校舎裏へとやってきた。生徒会室のゴミ捨て当番は気付いた人が捨ててくると言つ暗黙の了解で成り立つてゐる為、必然的に他の生徒より生徒会室で長い時間を過ごす生徒会長が捨てに行く義務を負つてゐるようなものである。

「お」

さつさとゴミを捨ててそのまま帰ろうと思つたわけだが、気弱そな男子生徒が顔を真つ赤にしている姿がそこにはあつた。多分、告白だらつ……何せこんな時間帯に校舎裏なんて告白以外思いつかない。まあ、いまどき校舎裏に呼び出して告白なんて時代遅れだと思つけど（実際は校舎裏に呼び出して脅して金をとるほうが多いかな）昔懐かしい光景ではないだろうか。

「嗚呼、青春かな」

そして青春に変わるんですね、先生……じゃなくて、だ。とりあえず相手はどこの誰だか確認するのも俺の仕事……いや、生徒会長の仕事のはずである。振られれば仲間、オーケーもらつたその日にはひっぱたいてやりたい。

相手を確認しようとすると肩を軽く叩かれた。

「兄貴、職員室で大神先生が呼んでるよ」

「え、マジでか」

大神先生とは音楽を担当している実に小うるさい先生である。軽口叩いたものは七代先まで祟りますとか言つていた事があつたらしい。面倒な先生として生徒の中では有名なのでどんな生徒も先生の前で非常に大人しくなる。

「悪いけどよ、あそこで俺のよつたシャイボーアが人生の分岐点に

立つてゐるんだ。だから俺の代わりに成否を見届けてやつてくれ……

あと、相手が誰なのかも一応見ておいてくれ」

「全く兄貴もデバガメだねえ……ま、あとは愛夏がしつかり確認しておいてあげるから早く行つてきなよ」

「おうおう、言つてくるよマイシスター……あと、そこに置いてあるゴミも捨てておいてくれ」

愛しい妹に別れを告げて俺は職員室へと向かつたのだった。ちなみに大神先生に呼び出された用事は単なる説教で『最近たるんじるのではないか?』といった事だった。三十分ほど言われ続け、ようやく帰路に就く事が出来た。

「ふー、やれやれ」

当然、その時間帯には誰もおらず愛夏もいなかつたので家に帰る事となつた。帰り道に面白い事も起きず、家に帰りついて早速愛夏に先ほどの事を聞いてみることにしたのだ。

「え? あ、うーん……えつとね、そのね、何つて言つつか……愛夏ちょっとわからなかつた」

「わからなかつたつてどういう意味だよ」

「えつと、だからわからなかつたんだよ」

そういうて部屋に入つてしまつた。

「何だあれ……」

わからなかつたのなら仕方がない。あまり他人の恋路を邪魔していると缶コーヒーを投げつけたくなるかもしれないからこれ以上の詮索は止しておこう。

こんな感じでその日は平和に終わつたわけだ。

次の日、中州と共に生徒会室で弁当を食べていると千穂が入つてきた。いつものように無表情……と言うわけでもなく、どこか落ち着きのない表情をしている。

「新戸先輩、相談があります」

「おう、何だ?」

友達が出来ないのか?いや、それならこの前解決したじゃないか。

うるさい、友達なんて多く作るもんじゃないぞ。金を借りるときだけくこくこしゃがつて期限當日待ち合わせ場所で待つても来ないし、電話すれば留守電にしゃがつて……観念したかと思えば払えないから期限を伸ばしてちょとか……いや、別に何でもないですけどね。

「実は男子生徒から告白されたんです」

「ははは、そうか。そりやよかつたな…………？」

今何と言つただろ？……なんてべたな事は言わない。そう言つのは要らない。田の前に座つている中州はいつもの表情で多分、俺の顔も一応いつもと変わらない表情をしているだろ？

「中州、席空けてくれ

「わかりました」

「さ、詳しく述べ話を聞かせてくれよ」

弁当をさつせとかきこんで千穂に座るよつ促す。昨日の光景がふと頭に浮かんだ。いや、まさかね。

第十六話・アドバイスの結果

第十六話

千穂が生徒会室に相談しにやつてきて数時間後、俺はぼーっとしている事を教師に咎められて生徒会室で微妙にへこんでいた。前髪を自分でちょっと切つていたら切りすぎちゃった時ぐらいいへこんでいた。

「はあ…」

「新戸君元気がないですねえ。もしかして千穂さんが告白されて動搖されているんですか？」

ぐるぐる眼鏡を人差し指で軽く押し上げる中州に首をすくめる。

「いや、別にそんなわけないぞ」

「じゃあふうたるーはなんで元気ないの？」

中州の後ろからジユディーが出てくる。隠れていたつもりのようだが中州より身長が高いし、髪の毛も見え見えだ。忍者のようなコスプレをしているが、忍者はちょんまげのかつらをかぶつて行動しないと思うぞ。

「千穂にアドバイスしただろ？」

「してましたね」

「あれでよかつたのだろうかって思つてたんだよ」

「へえ、告白された事のないふうたるーがねえ」

ちらつと頭の中に黒髪のお嬢様が右から左へと移動していった。今頃何しているだろうか。

「ジユディー、言いすぎです。新戸君は大久保生徒会長に逃げられたんですから傷心中なのですよ

「ああ、そういえばふうたるーの事を好きになつた奇特性な生徒会長もいたねえ~」

「言いたい事をズバツと言える」の一人ならきっとこれから先もいきコンビのままなんだろうな。

「失礼しまーす。兄貴ー、一緒に帰らつよー」

「生徒会室に愛夏が入つてきた。

「あれ？ 中州先輩にジユディー先輩まで残つてゐるの？」

「これから世紀のふうたろー残念顔を見る事が出来るの」
目を輝かせているジユディー…友達として酷くないだらうか。いや、別に俺は残念顔なんてしないけどな。

「今日のお昼、千穂さんが告白されたことに対してどうすればいいのか新戸君に相談しに来たんですよ」

いまいち理解していらないような愛夏に中州が説明している。

「ふーんなるほどあ」

「ま、俺としてはあのアドバイスが役に立つたかどうか知りたいだけだ。そういう理由でこいつやつて生徒会室から校舎裏を監視している」

校舎裏には千穂が一人たたずんでいる。

「アドバイスつてどういう事したの？」

「新戸君は『嫌なら断れ、嫌じゃないなら受け入れろ。はつきりしないのが一番駄目だ』って偉そうに言つてました」

「それアドバイスかなあ」

「ふうたろーそれ違うと思うけど」

「新戸君なりのアドバイスだと思ひます。千穂さんはやたら納得していたようでしたから」

「ここで俺の堪忍袋の緒が切れた。

「さつきからうるさいなあ……もうとつぐに帰つていい時間だろ？
さつさと帰つていちゃいちゃでもしてろよ」

「えー兄貴がいないと出来ないよ」

「いやーん、秀作～助けてー」

「いつもだつたら寛大な心の新戸君が怒つていますからね。きっと千穂さんが告白されたのがよほど腹に据え兼ねたのでしきう」「よかつた、すぐに運命の人に出会えて……ああはなりたくないわ」「新戸君には悪いけど僕もです」

「秀作つ」

「ジユディーつ」

一人で抱きしめ会つて いる光景なんぞ見たくないの で校舎裏へと
視線を戻す。愛夏も両手を広げて寄つてきたので威嚇しておいた。

「お」

ちよつと男子生徒が現れてスタンバイしていた千穂が相手の方へと
移動し、頭を下げた。どんな表情をして いるのかここからは見えな
いが、相手の顔を見ることはできる。

「……おや、千穂さんは頭を下げましたね」

「相手の子は四つん這いになつてゐるよ」

「土下座までしちゃつたよ……」

千穂は一礼して去つて行つた。相手の男子生徒はどうやら泣いて
いるようである。

「振つちやつたよつですね」

「惜しい、ここで千穂ちゃんが頷いたらふつたるーがどんな表情し
たのか興味あつたのにつ」

「……さーて、見るもんみたし、帰るか。今日は機嫌いいから帰り
にたこ焼きでもどうだ?」

「おーいいねえ」

「愛夏も食べる」

見ていで実際に静かな戦いだつた。でもなあ、まさか見て いたなん
て千穂は知らないだろうしアドバイスの結果をわざわざ聞くのも考
えものである。

第十七話・生徒会長通常業務

第十七話

紗枝の学校に比べてこちらの文化祭は規模も小さく、午前中で一応終了予定である。あとは講堂、体育館のステージで自己満足ライブが行われたり、地域のご老人の方々との心温まる触れ合いが（将棋、囲碁などの静かな戦いが行われる）ある程度だろうか。

やること自体が少ない為に湯河原さんとの打ち合せも特にないようと思えた文化祭三日前、その日は珍しい事に千穂がいる日のことだった。

「新戸生徒会長っ。あたし達、模擬店がやりたいんですっ」

そういうて生徒会室に入ってきたのはソフト部の皆様。どうするんですか生徒会長という視線が俺に向けられている為、咳払いをしてとりあえず入ってきた部員（数十名ほど）のリーダー格を座らせることにした。

「僕としては模擬店を文化祭でやると色々と勉強になることもあるから賛成だよ。だけどね、学校側に許可をもらつたりしないといけない。そして準備も今からやつて間に合つのかな…」

最初に言つておく……別に面倒と言つわけではない。女の子から頼まれて（しか�数十人が一人の男子生徒にお願いするなんて俺の知る限り無いことだ）嫌な男もいないだろう？あくまで生徒会長としての意見である。

「この前女子高の文化祭に行つて感動したんです。ああ、あたしたちもこんなことをやつてみたいなつて…これ、見てください」

手渡された紙は何度か目を通した事のある紗枝の居た学校で使われたいわば模擬店の企画書のようなものだつた。向こうで使用されていたこれまでのノウハウがびつちりかきこまれている物で紗枝からも『貴方が生徒会長ですからお見せするのです』といわれたぐらいた。

「今年はこれを真似するぐらにしか出来ないですけど……やつたいんですつ」

部員一同が頭を下げてお願いしますと叫んだ。廊下で待機している一年生も頭を下げている。さうに今は部活をしていない三年生までいたりする。まあ、三年生には主に写真のモデル等でお世話になつたからな。

「わかりました。僕が今から職員室に行つて模擬店の許可をもらつてきます。でもあまり期待はしないで下さいね」

さすが生徒会長だーという声も聞こえてくる。マネージャーの女の子は今度中州先輩×新戸生徒会長で一冊本を書いてくれると今まで言つてゐる……丁重に断つたけどな。

「今日の放課後にはちやんと結果を報告します」

「お願いします」

ソフト部の人たちを見送ると今度は生徒会メンバーが詰め寄つてくる。

「あんな簡単に安請け合いしちゃつて大丈夫なんですか」

「楽しそうですけどもう文化祭まで時間ないですよね」

「パンフレット、出来ちゃつてますけど」

「あー、はいはい。全部大丈夫だ。俺がなんとかする」

あーあ、あの子たち可哀想だあとか早速言つてゐるメンバーまでいるから信頼なんて最低値なんだろうな。野郎の信頼なんざいらんが、女子の信頼は高くしておきたい。

「千穂、職員室までついてきてくれ」

「わかりました」

「じゃ、行つて来る」

「どうせ駄目でしょうけど新戸君、頑張つてきてください。僕も模擬店楽しみですから」

「おう、任せとけ」

中州の言葉に背中を押され、俺は職員室を後にした。

「新戸先輩」

もう少しで職員室と言つところで千穂が口を開いた。

「千穂も模擬店がやりたいのか？」

「そうではありますん」

「じゃあ何だ？」

「この前のアドバイス、ありがとうございました」

「そうか、そりやよかつた」

「そうです」

千穂がそうと云つた後に何の事だつたかようやく思に出したりする。最近忘れっぽくていけないな。

そのまま職員室の方へと歩いて行こうとする千穂が立ち止まっている。

「ん？ どうしたんだ？」

「新戸先輩は女子からのお願いされるのは嬉しいんですか？」

「まあ、それなりに嬉しいぜ」

本当は凄くうれしい。うれしいけど、ここで犬みたいに尻尾振つて頷いたら馬鹿以外の何物でもないだろうな。

「そうですか？」

「ああ」

「では、そろそろ行きましょうか。早くしないと次の授業が始まってしまいますから」

千穂を連れての話し合いは一時間程度で終わるはずだつた。予定時間より一時間ぐらいかかったがなんとか許しを得て放課後、千穂と共にソフト部の元へと向かつた。

「許可をもらいました。あとはあなた達がどれだけ頑張れるかにかかりています」

「ありがとうございます。これも生徒会長さんのおかげです」

一同綺麗に並んで俺と千穂に頭を下げている。こういうのを見ると生徒会長をしていてよかつたなと思うね……いや、これがいがぐり頭の野球部連中だつたらさつさと帰つっていた事だろうな。

「皆さんいい笑顔していましたね」

「そうだな、ああいうのを見るどがんばってよかっただって思つよ」
その後は教室まで鞄を取りに行こうと思つていた。生徒会室に行
くのも別にいいだらうし、湯河原さんへの連絡は明日でいい事にな
つていい。

「新戸先輩」

「どうした？」

「話があります。一いつ時に来てください」

そろそろ銀杏も色づき始めるころか……まさか千穂がそんな話を
するわけもないだろう。俺は千穂に手招きされるまま校舎裏へと向
かつたのだった。

第十七話・生徒会長通常業務（後書き）

久しぶりにあとがきを書いている気がします。さて、あと数話で終わりですかね。二十前後で終了つてところでしょう。今回の奴もかなり反省点が多い結果となつたのが残念ですが、読んでくださった読者の方々、ありがとうございました。

第十八話・結論を出す前しみ

第十八話

田玉焼きには何をかけるか？素か、ソースか、しょうゆか、マヨネーズかケチャップかその他諸々人によつて違つ物をかけるもんだ。ちなみに俺は醤油だ。これはやはり親の行動を見てまねたものと言つていいだろ。

「ちょっと、兄貴？」

「ん？ どうした？」

「お皿から醤油がこぼれてるよつ」

「え……ああ。 そつだな」

テーブルを醤油色に染め上げていたのでぼーっとしながらテーブルを拭く。

「これでいいな」

「今度はお味噌汁こぼしてるとつ」

愛夏の指差す先には豆腐が転がつていた。

「あ……悪い」

拭いていた時に当たつたのだろう。こぼれたみそ汁も拭きとる。すでに布巾からは様々なにおいをかぎ取る事が出来る。

「どうしたの？」

「何が？」

「飯を口に運ぶ俺をジト目で見てくる。

「ぼーっとしてさ」

「別にしてないぜ」

「でもお箸が逆さまだし左手でお箸握つてるとつぱりぼーっとしてるつて」

「……ああ。 文化祭があるんだよ。 俺の通つている高校がな、明日文化祭なの。 それで、俺生徒会長やつてるから大変なの」

「愛夏も通つてるし、あさつてが文化祭だよ？」

「…………ああ、そうだ……」

俺の顔面に鋭いストレートが飛んできた。茶碗、箸をその場に落としてしまう（落とした物は全てスタッフが美味しく頂きました）。

「あ、愛夏あ……痛いだろ」

「愛のムチだよ」

「俺はMつ氣ねえよ。どっちかと言ひつと攻める方が好きだ」

「いつでも攻めてきてよ……あのせ、何かあったの？」

愛夏にそう言われて俺は一瞬押し黙った。

「何もなかつたよ」

「嘘だよ。だつて顔に『何かありました』って書いてあるもん」

「嘘つけよ。顔にはお前の拳跡が残つてるだけだよ」

本当は色々とあつたんだよ。千穂に校舎裏に呼び出されて『新戸先輩の事がおそらく好きです。でも、よくわかりません。あとこれを読んでください』とか言われた。おそらくつて何だよ。

渡された手紙の差出人は紗枝。内容は文化祭の時に来るから文化祭が終わったら屋上に来てほしいといったものだ。

「私は、文化祭が終わったら校門前で待つてます。来てください」

そういつて帰つて行つたのだ。

さて、これはどういう事だらうか？

どういう事なんだろうな。

どうすればいいんだろうな、俺。

そして、どうなるんだろう。

「なるほど、そういう事があつたんだね」

「あ？ 説明してないだろ」

「今一生懸命説明してたじやん。本当に大丈夫？」

「大丈夫だよ」

その心の底から心配したような顔はやめてくれ。

「で、どうするの？」

「どうするのつて愛夏、そりやお前……」

紗枝か？殆ど一緒にいなかつた。でも凄く相性いい氣がしてなら

ない。性格も一見するといつんつんしてやうな感じだが、実際は素直で可愛い。

「千穂ちゃんや、中学の頃から兄貴の事好きだつたのかも。一度兄貴に怒られたつて見たことないよつた顔して泣いてたし、転校しても手紙送つてくねぐらいだからねー。兄貴つてばそんな一途な子を捨てるんだ」

「お前はどつこいつかいつつかなー。つーか、捨てるつて何だよ」

千穂……ねえ。うーむ、ひいき田なしに見てまあ、可愛いけど長く一緒にいたからなあ……。ああ、悪いところばっかり考えちまうぜ

「一緒にいたから全部知つてるつて?つとも、まだ裸も見てないじゃないのさ」

「あのなあ……」

「冗談だよ、冗談」

嘘つけよ、その第三者の立ち位置は凄くおいしい立ち位置ですつて言つ顔はやめろよ。

「文化祭まで兄貴は苦しみ続けるんだね?」

「にやにやしながらいつなよ」

「じめんね兄貴」

「だから心底嬉しそうな顔をするな……いや、わあ、なんだかおかしくないか?もしかしてこれはあの千穂が普段俺からこき使われているからさややかな仕返しなんじやないかつて思つちまつ」

小悪魔的な笑顔の千穂が策略に堕ちた俺を見ている姿が目に浮かぶ。

「それないよ。あの千穂けやんだよ?」

「……冗談だよ。わかつてるよ」

紗枝が、千穂か、それとも逃亡か……。逃亡?いつその事この町から逃げちまうか。嫌待て待て、これは両方選ばないつて言つ手もあるんじゃないか?

「あのや、兄貴」

「どうした、妹よ？」

「曖昧な答えが一番駄目だよ。傷つくなよ」

「それは安心してくれ。俺はちやーんと結果を出して見せる」

「そつか、安心したよ」

「じゃあ今日早いからもう行くねと愛夏は先に行ってしまった。愛夏にああいった手前、結果は出さなくてはいけない。」

「うー……やっぱり逃亡か？」

「あの場所ですっぱり結果を求めてくれていたらこんなに苦しむことはなかつただろう。まさか猶予を貰えてくるとは思わなんだ。」

「うあーどうすりゃいいんだよつ」

「俺の声は誰もいない家の中に響くだけだった。」

第十九話：文化祭

第十九話

文化祭一日前もずっと悩んで過ぐした。千穂は俺と普通に接し、俺も表面上は普通に接していたけど心の中では何か言われるのではないかと気が気でなかつた。

そして文化祭当日を迎えた。生徒会長が文化祭中にやることなんて殆どあるわけもなくとりあえず午前中…つまりは予定されていた学校側のプログラムはすべて終了となつた。あとは放課後扱いとなるが、これから行動を起こす者たちもいるのだ。

前日に模擬店を出したいと言つてきたグループが数組あり、その内三組だけに特別許可を出した。他は論外。何も考えていないだら騒ぎたいだけの連中が行おうとしただけの物だつたからだ。

見周りと連絡を兼ねて模擬店の方へ行くため千穂連れて行くことにした。生徒会室にいると思って向かつてみると、そこにはいちやいちやしている一人組しかいない。他の生徒会のメンバーも何処かに行つたようだ。

「千穂がどこに行つたのか知らねえか？」

「もう待ち合わせ場所に行つたんじゃないですかね」

中州のその言葉についたじろいでしまう。

「ふうたるーのこと、待つてると思つよ」

「そう…か」

まだ仕事は残つてゐるんだけどな。これでは仕方がない。この一人につまくいつているかどうか見てきてほしいと頼むのも危ない気がした。

「もし千穂が戻つてきたら終わりの時間は夕方つてちゃんと伝えておいてくれよ」

「わかりました」

「いつてらつしゃーい」

さつさとどこかに行つてくれればいいのになあと「一人の視線に別れを告げて店がどういった状況なのか見に行くことにした。

曲がり角を曲がったところで何処かで見たことのある女生徒と出

会つた。

「おや、新戸さんではないですか」

「湯河原さん……来てたんですか？」

「模擬店の件についてそちらの生徒さんから相談を受けましてね。うまくいっているのがどうか見に来たのもあります」

「そうですか。ちょうどこれから俺も様子を見に行くところだつたんですよ」

「では一緒に行きましょうつか」

湯河原さんの話によるとあちらの生徒さんも結構来ているそうで（見るとこりなんて無いと思うが）何故だかこっちの囲碁部や将棋部を軒並み倒しているやうである。

露店の一つが見えてきたところで湯河原さんは思ひだしたと言わんばかりにある言葉を口にするのだった。

「待つているつて言つていましたよ」

「……誰がでしょっ？」

「えーと、前生徒会長が

「そうですか

「はい」

いつか見た紗枝の横顔が頭の中で構築されていく。そして同時に千穂が校門に背を預けているところも想像出来た。

こんなのじや文化祭を楽しめるわけもない。

「文化祭、ちゃんと楽しんですか？」

「……はは、生徒会長ですからそもそもできませんよ

「期限が今日までみたいですから大変なんですね。あれなら模擬店の方一人で周つておきましょうか」

提案した湯河原さんに俺は首を振る。

「いや、大丈夫です。こつちは生徒会長の仕事ですから

私事と仕事を一緒にすることはよくない。とはいっても、早く終わらせたいのも事実だ。一つ田の模擬店はソフト部のみんながやっているもので、これは全然問題ない。盛況だったし、許可をしてくれてありがとうと喜ばれた。

「次はたこ焼き屋ですね」

「そうです」

「ここはもつ本格的と言つか、駐車場にたこ焼きの焼ける車を持つてきており『～～監修』とまで銘打たれていた。何でも父親が以前やつていたたこ焼き屋の屋台をそのまま持つて来たそうである。

「すごいですね」

「確かに…」

「あそこの禿げた人が監修してるんでしょうけど、あの生徒さんも頭にねじり鉢巻きが似合つてますね」

「娘だそうですからたこ焼きやつてたんでしょう」

「ここも裏方のスタッフに徹している生徒に聞くと結構いい売り上げのようだ。どこも問題ないとのことである。実際もじつて食べてみると普通においしかった。」

問題があつたのは次の店舗だった。

「あの黒い固まり、何でしょう」

湯河原さんの質問に対しても、俺は手持ちのパンフレットを覗きこむ仕草をする。

「……資料によると焼きそば屋です」

「繁盛していませんね」

「ですね」

近づいて話を聞いてみると、

「どうしたんですか？」

「じ、実は…今日料理担当だった子が全員腹痛で休んじゃって…誰も作った事ないんですけど焼きそばくらい大丈夫だってやつたらこうなつてしまつたんです」

泣きながらそう言つてくるのは一年生のじつかで見た眼鏡君。

「そうですか、それじゃあもう諦めるしかないですね
「はい…」

料理担当の子が腹痛で休んでしまつているのでは駄目だらうな。
集団食中毒か何かだらうか…。

「じゃあ看板下ろして、休んでてください」

「待つてください」

「湯河原さん？」

「私がやります」

上着を脱ぎ捨て、鉢巻きを装着。眼鏡君のエプロンを奪い去つて
自分に付けた……結構似合つてゐる。

「いいんですか？」

「はい、私に任せてくれさい」

当然、その場にいる他の生徒は困惑している。とつあえず安心させる為に嘘をつくことにした。

「えーと、この人は女子高の生徒会長さんで……料理がすこくうま
いから安心してもらつて構いません」

「後の事は任せて、次の模擬店に行つてください。紗枝さん、待た
せると怖いですから出来るだけ早くに会いに行つてあげてください
「わかりました」

ちょっとだけ託して大丈夫だらうかと思つたけど、彼女のやる気
を見る限り大丈夫そうだつた。俺は彼女の言つとおり最後の模擬店
へと向かい、後日諸経費をまとめた紙を生徒会室に持つてくるよう
言つてその日の生徒会長としての仕事を終えた。

午後の分も夕方になつて終わりを告げた。

結局決める事の出来ないまま、俺はこの時間を迎えたのである。

第一十話・終わり

第一十話

（『I』のような形で手紙を出すことを許してほしいと思います。あの時、貴女が一方的に約束を取り付けて指定した場所へ私は行きませんでした。正確にはいけませんでした。知つての通り、私はあの田階段から足を滑らせて頭を強く打つてしまいました。この手紙を書いている時点でもまだ病院のベッドの中にいる状態です。

病院の場所は残念ながら教えられません。貴女の事でようから教えたるすぐにしてくれるでしょう。退院はすぐになりますから安心してください。本音は恥ずかしいだけ、面と向かつて会つことが出来ない私を許してください。メールで送ればいい程度の内容ですが、メールだとあつという間に貴女に文が届いてしまいます。それでは何だか味気ないので手紙を送りました。退院したら私はずっとあの場所で待っています。改めて彼女になつてほしいって伝えます

「……こんなもんか」

大事な勝負事のときにパンツをはいて行くのを忘れるような心境である。あの時、焦つて階段から転げ落ちてしまふなんて俺らしくもない……。

「ジユース買つてきたよ、兄貴」

「おう、悪いな。帰るときこの手紙をポストに投函しててくれ」手紙を差し出すと愛夏は妙に嬉しそうな顔をしていた。

「ちやーんと覚えてたんだね」

「そりや そりや。忘れることなんて出来ねえよ」

「ふーん……意識戻つた時は完全に記憶失つてたじやん。おばさんとが愛夏、泣いたんだからね？」

「しようがないだろ」

「ま、兄貴がいつのままでよかつたよ。また明日退院する時に来るから

「おつ」

愛夏もいなくなつて静かになる。そろそろ面会時間も終わりを迎えるのだろう。しかし、病院とは本当に退屈なところだ。

「今寝たら夜眠れなくなるもんなあ」

枕に頭をのせて真つ白な天井を見上げる。外からは車の通る音が聞こえてきて、廊下の方では人の歩く音が近づいてくる。病室と廊下をつなげる引き戸が開けられ、そこには先ほど手紙を出した人物が立っていた。

「え? どうして分かつたんだよ……ああ、そうか、愛夏の奴か

……」

普段氣を利かせない癖してこいつだけはお節介である。来てしまつたのは仕方がない。俺は手招きをして座るように促した。

「ま、見ての通り俺は元気だよ」

「……」

相手は無言のまま手紙の中を開けて最後の一文を指差している。身体が熱くなつてきてどうしようもない。心なしか相手の顔も赤かつた。

「……えつとだな、俺は……その、彼氏になりたいんだ。何日、何ヶ月、何年かは分からぬ。こいつぱり振られるかもしれないけど

俺は……」

個室だつたからよかつたものを…俺は病室で思い切り相手の名前を叫んで告白したのだ。一生忘れられない嫌でもあり、嬉しい思い出になる事だろう。）

「だつたら……こんな感じだつたら俺は大丈夫だと思つんだつ。俺は天高く腕を突き上げてそついた。

「保健室で騒ぐんじやないよ、ボケ」

「すみません」

保健室の先生に怒られてしまった。

そんな俺を呆れた様子でよつつの田が見ていたりする。

「それで風太郎…」

「先輩はどうちに決めたんでしょう?」

階段から落ちたには落ちた。落ちたけどそんなに重傷じゃなかつた。それでも俺の叫び声を紗枝と千穂が聞いたらしく同時にやつてきた。そして保健室に連れてきてくれたのだ。

「早く答えてくださいます?」

「待たせないで下さい」

詰め寄られては逃げることなんて男らしくないから出来ない。そもそも、足が痛いから逃げようとしても逃げられない。

私に翼があつたなら、私は飛んで逃げただろう。

「あの、新戸先輩」

「…いつものように落ち着き払つた千穂がしつかりと田を呑ませてくれる。

「……大久保紗枝さんは遠っこりからこいつやつて来ててくれているんです。だから、先輩がちゃんと答えないことあつちで泣けません」

「千穂さん? それはわたくしの事を風太郎が選ばないと言つ葉に聞こえますわよ?」

「そうです」

「まあ、あなたの言葉なんて構いませんわ。あちらで泣く必要なんてありませんの。」この文化祭が終わったらわたくしはこっちの生徒ですもの」

「高笑いがよく似合うのな。それこじりでもいいか……。

「風太郎」

「はい、なんでしょうか」

「早く千穂さんにびしつと引導を渡して差し上げて」

「先輩は優柔不斷なところがありますから言えませんよ」

全くその通りである。口をつぐんでついでに耳も閉じている状態だ。しかし、このまま無駄な時間を続けていても仕方がない。俺はこの時がやつてきたかと手を叩いた。

「聞いてくれ、決断した」

「……」

「……」

言い争っていた二人は静かになつて俺の方を見た。

しかしね、世の中には絶対に選んじゃいけない選択肢っていうものがあるよつて俺は見事にそれを選んだようだつた。選択肢を選んだ三十秒後、俺の両頬には天使の翼のごとき立派な手形が付けられた。

「いやー……いい音したわ。見ていたあたしもすつきりした」

「……やっぱり三人で仲良くしようはまずかったか」

明日にでも二人に謝るつ。今度言うときはこうやつて逃げない様に決めないといけない。手紙で送つたら喜んでくれるだろうか。

（終）

第一十話・終わり（後書き）

終わりです。ここまで読んでくれてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2225y/>

世界の窓が全開ですよ

2012年1月14日22時26分発行